

論文と資料紹介 — 論文

建築調査からみえる国士館大講堂の建築的特性

田中昭之・木川正也



「国士館大講堂」(以下、「大講堂」)は、文化審議会文化財分科会の審議・議決による同審議会の文部科学大臣への答申に基づいて、二〇一七(平成二九)年一〇月二七日、「国登録有形文化財(建造物)」に登録された。本稿では、登録の申請に先立ち、二〇一六年七月に行った大講堂の調査に基づき、大講堂の建築的特性と改修・変更の歴史について紹介したい。

一 大講堂の概要

大講堂の建築年代を直接示す棟札は確認されていないが、雑誌『大民』(第四卷第八号・第五卷第三号、青年大民団、一九一九年八月・同年十二月)には、一九一九(大正八)年七月二七日に上棟式、同年十一月九日に落

成式ならびに開館式が挙行されたことが記録されている。なお、設計者、施工者についての明確な記録はない

表1 国士館大講堂 建物概要(現在)

大正8 (1919)年 上棟	木造平 屋建て	外部仕上 腰下…洗出しモ ルタル、 一部壁板 張り 腰上…漆喰塗 屋根…銅板平葺 き	内部仕上 〔中央部〕 天井…折上格天 井、一部 目透し板 張り 壁…漆喰塗 床…畳(縁付)	規模 建築面積 285・34㎡ (86・20坪) 延床面積 268・81㎡ (81・21坪)
			〔廊下部〕 天井…竿縁天井 壁…漆喰塗 床…畳(縁付)、 一部寄木 貼り	

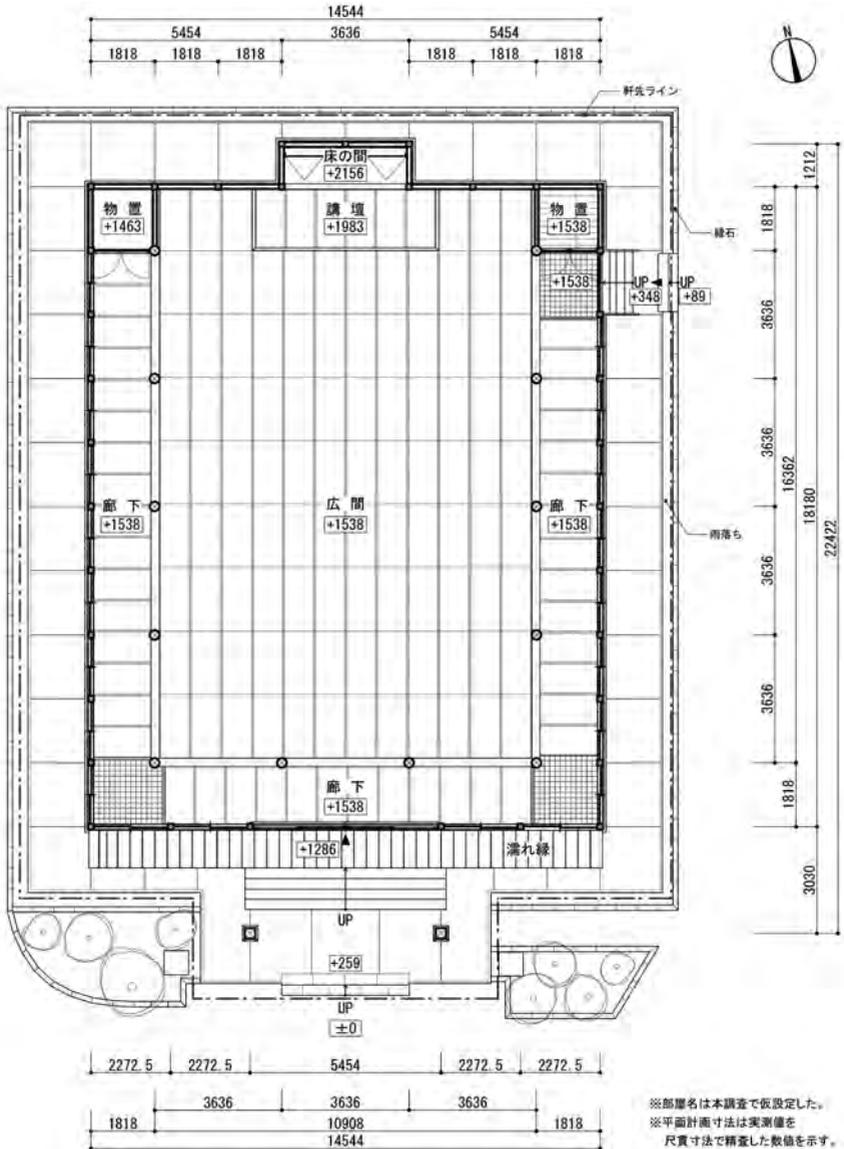


図 1 2016 年 国士館大講堂平面図

が、当時の設計図の署名、ならびに上棟式の写真にみえる職人の法被に「渡邊店」との記載が確認できる。なお、現時点「渡邊店」についてその詳細は不明である。

二 調査

二〇一六（平成二八）年度に実施した調査は、大講堂の建築時から現在までの用途や機能、および建築時の構法や建築後に行われた改変を明らかにし、その建築的特性を分析した。

本調査は大きく二つの方向からアプローチした。一つ目は現存する大講堂から直接的に情報を抽出する現地調査、二つ目は国士館史資料室に保管されている図面、写真等の資料調査（大学関係者からの聞き取り含む）を実施した。

1 建築調査

(1) 建築図面実測等調査

現状を把握するための既存図面（配置図、平面図）との照合、および建築的特性を把握するために必要な図面の作成（断面図や伏図、実測による野帳^①図面などの作成）。

(2) 仕様・構法調査

大講堂の建築的特性を把握するため、仕様（使用材料や仕上げなど）、および構法（建築時やその後の改変後のものなど）のスケッチ、記録。

(3) 痕跡調査

建築部材に残る痕跡（現存しない部材があたっていた仕口^{しぐち}などの跡）のスケッチ、記録。

(4) 調査記録写真の撮影

2 資料調査

主に国士館史資料室が保管している古図面・古写真、修理記録などの資料の写しを借用して内容の分析を行った。また、国土地理院が保有する古い航空写真なども並行して調査した。

3 調査日程等

(1) 日程

現地調査…二〇一六年七月七日～同月八日

資料調査…二〇一六年七月二八日

(2) 調査員

田中昭之、木川正也、牧野徹、伊藤香織、川原聡史、片山かな子（以上、株式会社建文）

三 現状からみる建築的特性

1 立地・配置

大講堂の建つ国士館大学世田谷キャンパスは、世田谷区世田谷四丁目に位置する。周辺には北側に小田急線梅ヶ丘駅、東側に吉田松陰を祀る松陰神社がある。南側は世田谷区役所と接し、その先には東急世田谷線が走る。西側は勝国寺に接し、しばらく行くと井伊家の菩提寺で井伊直弼の墓所が所在する豪徳寺がある。

大講堂は、南側正門より北進した真正面、世田谷キャンパスのほぼ中央に南面して配される。その東には五号館（一九五八年竣工）、北には一〇号館（一九六六年竣工）、西には七号館（一九六三年竣工）と八号館（一九六四年竣工）があり、周り三方を校舎に囲まれる。

講堂の南前には、植栽サークルに囲まれた創立者・柴田徳次郎の銅像が建つ。キャンパス内の通路は、この銅像と大講堂を中心起点として東西南北に通っており、大講堂の周りは学生達が行き交う場となっている。これは、国士館が移転した当初計画（一九一九年一月に建てられた大講堂、本部棟、寄宿舎、道場の四棟）の軸線が基本となり、その後も唯一残ってきた大講堂を核とし

て世田谷キャンパスが整備されてきたためである。

2 用途・間取り・意匠等

大講堂は、建設当初教室として使用されるほか、様々な式典や講演会場として利用されていた。関東大震災の際は被災者を広く受け入れたという記録も残っている³。現在は、大学のオープンキャンパス等の行事やサークル活動に使用されている。

大講堂は基壇上⁴に建つ木造平屋建ての真正面造りで、梁間八間、桁行一〇間、南正面に間口三間の向拝⁵かつき、切目板張りの濡れ縁⁶が正面に付く。屋根は妻入りの反りのある入母屋造りとし、向拝部分を葺き下ろす。現在の屋根葺き材は銅板平葺きで、向拝の軒先に銅製の軒樋⁷を渡す。外壁は腰下を洗い出しモルタル、腰上を漆喰仕上げとし、側柱の柱頭部に舟肘木⁸を据える。上屋筋の丸柱は九寸（直径二七二mm）とし、側柱は五・五寸（一六五mm）角、向拝柱は九・七寸（二九三mm）角とする。間取りは、中央を一〇畳（五四坪）敷きの広間とし、その南東西三方に幅一間（一八一八mm）の畳敷き廊下を廻す。廊下は天井高さ一一・八尺（三五六九mm）の竿縁天井とする。広間は天井高さ一六・二尺（四九一三mm）の折上格天井として広間の格式を高めている。広間正面

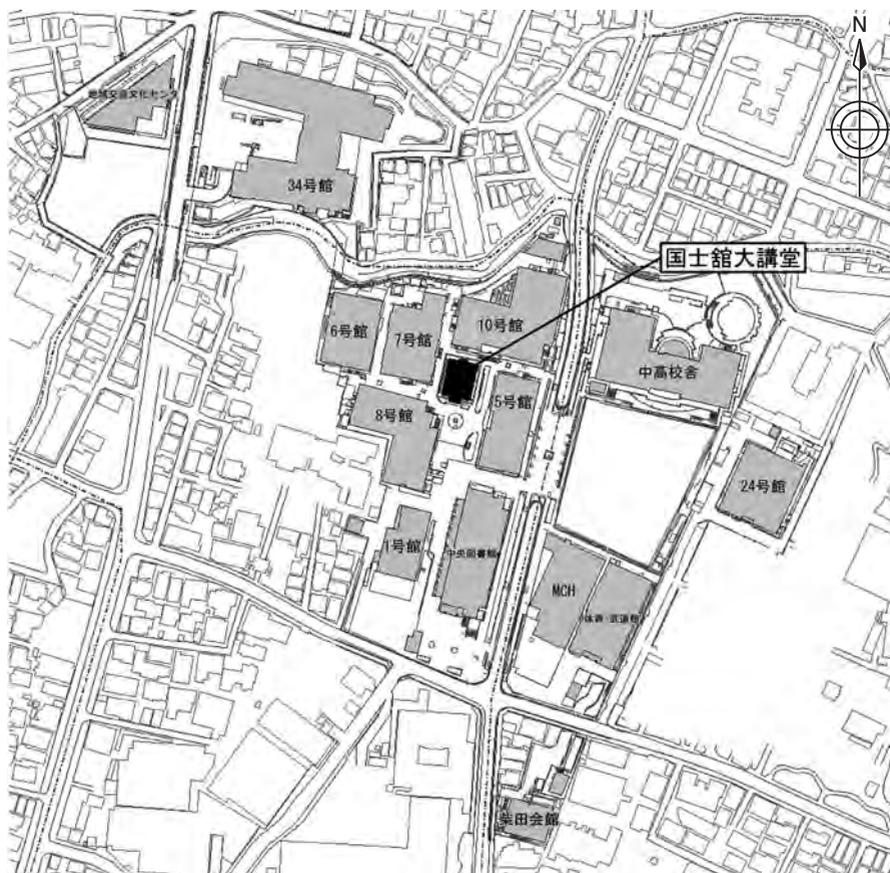


図2 世田谷キャンパス内の国士館大講堂の位置 (2017年現)

奥には幅三間、奥行一間、高さ一・五尺（四五五mm）の畳敷きの講壇を設ける。その奥には、さらに五・七寸（二七三mm）上げた幅二間、奥行四尺（一二二二mm）の床の間を設える。両脇廊下の北奥は、左右とも物置とする。

外観は一見すると入母屋造り、妻入り、流れ向拝付きの神社仏閣の様相を呈しており、「国士館上棟式記事」〔『大民』第四卷第八号、青年大民団、一九一九年八月〕の「軽薄なるペンキ塗、西洋館の競って建造せらる、現代を超越し、「中略」鎌倉時代の講学所に観る如く、或は僧院の堂宇に似て、「中略」純乎たる日本式を發揮せるは、日本魂の為め大気焔を吐けるの概あり」の記述通り、国士館の教育理念を日本の伝統的建築によって象徴的に表現している。

3 構法

(1) 計画寸法

平面計画寸法は、各柱間寸法を実測した結果、一間（六尺）は一八一八mm、二間（一二尺）は三六三六mmの近似値を示した。一尺が三〇三mmの尺貫法により計画されたことが分かる。

断面計画寸法は、正面出入口内法七・九六尺（二四一三

mm）、広間、廊下境内法八・五三尺（二五八六mm）、土台上端から敷桁上端までが一九九尺（六〇五三mm）、敷桁上端から棟木上端までが一六〇六尺（四八六八mm）であった。

枝割り（垂木割り）についてみると、一枝寸法（垂木が配される間隔）の実測値は一・五尺（四五五mm）である。正面の向拝および出入口の柱間は二二枝（一・五尺／枝×一二枝＝一八尺）、その他柱間は五枝で正面出入口両脇がそれぞれ二間であることから、梁間合計三二枝が割り付けられる【写真1】。背面および側面の柱間は四枝で、背面は八間で合計三二枝、側面一〇間で四〇枝が割り付けられている【写真2・1・2】。垂木は、実測値中二・一四寸（六五mm）×成二・六四寸（八〇mm）で、その中は一・五尺（一・五尺）の七分の一割（一・五尺×一／七＝二・一四寸）であった。側柱は五・三五寸（約一六二mm）角で、垂木中を除すとその二・五本分（二・一四寸×二・五＝五・三五寸）、向拝柱は九・六三寸（約二九二mm）角で垂木中の四・五本分（二・一四寸×四・五＝九・六三寸）となる。なお、内部の丸柱は、九寸（直径約二七五mm）で垂木中の四・二本分となっている。柱頭につく舟肘木は、高所のためその寸法を実測できなかったが、目視によるとその中（長さ）は側廻りのもの

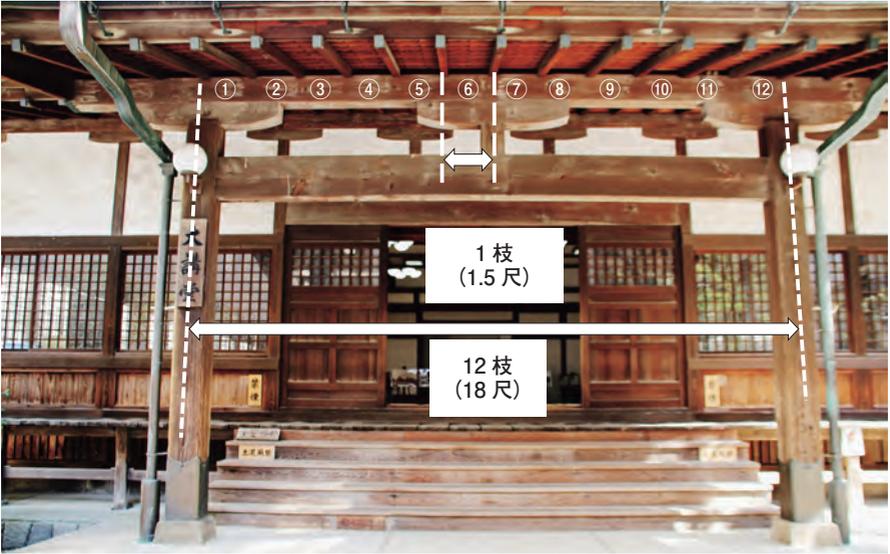


写真 1 正面の向拝および出入口の柱間



写真 2-2 背面の柱間

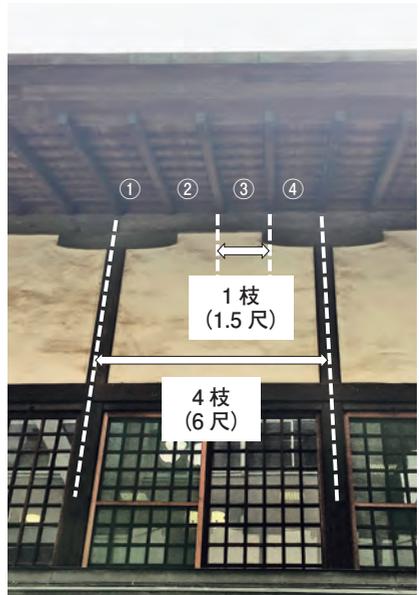


写真 2-1 側面の柱間

は二枝と垂木巾一本分、向拝のものは三枝と垂木巾一本分、それぞれ垂木巾で除すると、その一五本分と二二本分となる。

以上より、外部廻りの主要部材の寸法は、垂木巾を基準にその比例関係によって部材寸法を決めていた可能性が高いと推定される。

(2) 工法および技法

① 基壇

大講堂は、周辺地盤（校内通路）面より一段上げた基壇上に建つ。基壇は、現状の地盤面より八・五寸（二六〇mm）程度上がり、基壇側面は割肌わりはだの石張りで、基壇上面の犬走りはモルタル櫛引き仕上げ（目地有）とする。正面向拝部分は切石を二段敷き並べた階段を設ける【写真3】。

基壇外周の現状地盤（校内通路）との境は大講堂の屋根軒先付近となり、砂利石を敷き詰めた雨落ちとしてい【写真4】。

② 基礎

外周および広間、廊下境の上屋部分の柱下は切石の独立基礎（礎石）を設置する。側柱下の礎石は一尺（三〇〇mm）角程度、内部柱下の礎石は一・五尺（四五五mm）角程度である。礎石下のコンクリート製の基礎の有

無については現状、目視では確認できない。外周から布基礎きそ状にみえる柱下礎石間の切石は、厚さ五寸（一五〇mm）、長さ二・五尺（七六〇mm）の薄い切石を、意匠上、礎石外面に合わせて敷き並べたもので、構造上の布基礎として土台を受けているわけではない【写真5・6】。

いずれの石も外周部の上面は面取りを施して水切れに配慮している。正面向拝柱下と濡れ縁ぬれぞろの束下たばは、テーパーのついた切石礎石とし、内部の円柱下は割肌の礎石を用いる。床組つかいの束石たばはコンクリート製のものへ更新されており、旧材は残っていない。

③ 軸組

軸組は土台、足固めあしこめ、柱、貫ぬき、桁たば、梁はりにて構成する伝統軸組工法である。

ア 土台

土台は建物外周にのみ廻り、内部の柱は礎石へ石いしば建てとす【写真7・8】。土台（広葉樹）は、一七五×一五〇mm程度で、アンカーボルトによる緊結が確認される【写真9】。しかし、アンカーボルトと基礎との緊結方法は現状、目視では確認できない。また、カスガイ状のコの字型の鉄板金物を土台と柱に打ち込み、さらに釘留めしてその二材を緊結する。この金物は柱が土台から抜けることを防ぐものである【写真10】。



写真4 大講堂背面側



写真3 大講堂正面側

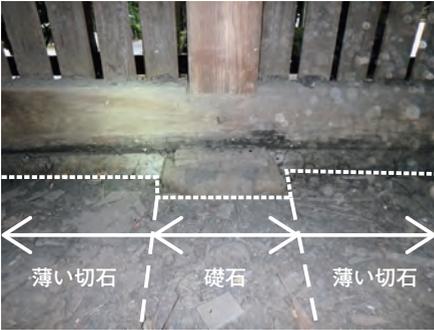


写真6 側柱下の礎石 (内部)

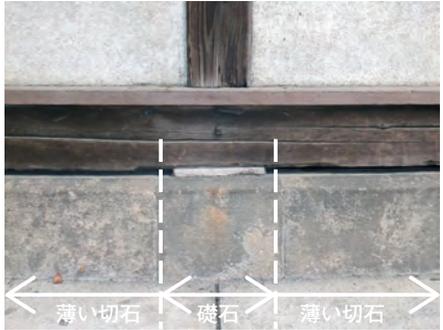


写真5 側柱下の礎石 (外部)



写真8 内部柱 (石場建て)



写真7 南側土台 (板子格子付)

現代の木造建築の構造の考え方と同じく、基礎と土台の緊結、土台と柱の抜け防止に配慮していたことが窺えるが、これらの構造的配慮が建築時のものか、関東大震災（一九二三年）後のものか現時点において確定はできない。

イ 床組

床組は足固め、大引、根太掛け、根太で構成される。足固めは廊下と広間境の内部丸柱間に設置される。大引は、広間は桁行方向に三尺（九〇九mm）間隔で、廊下内は中央の長手方向に渡され、側柱、丸柱に桁行方向にとり付けられた根太掛けとともに根太を受ける【写真11】。広間、廊下ともに根太は一・五尺（四五五mm）間隔で配される。大引、足固めは三尺（九〇九mm）間隔で立つ床束に支えられる【写真12】。床組は大きく改修されており、当初のものと思われる部材は、五寸（一五〇mm）角の足固めと、三・三寸（一〇〇mm）角の面皮付きの大引と直径三寸（九〇mm）の丸太束である。大引上に渡される一〇八×三〇mmの根太とその上の合板荒床（畳下の床板・厚さ一五mm）は、全て後補材へ更新されたものである。また、当初の大引の間には、三・三寸（一〇〇mm）角に製材された後補大引とそれを支える後補床束が補強のために設けられている【写真13】。

ウ 軸部

軸部は大きく広間の身舎空間と廊下の廂空間に分けられ、さらに南正面に向拝が付く。身舎空間を支える内部丸柱（入側柱、杉）は直径約九寸（二七二mm）で、切石礎石（独立基礎）上に石場建てで立つ。柱頭については、梁間方向は陸梁、桁行方向は敷桁を受けるが、柱長さが足りないため、柱頭と桁の間に調整用飼木を挟んで桁を受ける。陸梁は敷桁に掛かるため、下面で六寸（一八〇mm）の高低差が生じる。そのため飼木は桁行、梁間でそれぞれ成九・六寸、三・六寸×巾六・六寸×長さ二尺（二九〇、一一〇×二〇〇×六〇〇mm）と高さが異なるものが用いられている。飼木は敷桁と二本のボルトで固定される。なぜ、柱の長さが足りなかったのか現時点では不明であるが、柱の全長が一九尺（約五・七m）もあることから、当時の規格材料長さや運搬上の制限による可能性も考えられる【写真14】。

廂空間の外部に立つ側柱（杉）は五・三五寸（約一六二mm）角で、面取り巾は柱巾の約一六分の一（約一〇mm）である。土台上に立ち、柱頭に舟肘木を据えて丸桁を受ける。正面出入口の間口三間には差鴨居が掛り、その上に中備えとして舟肘木とそれを受ける束を二本備える。側柱と土台の仕口は目視で確認できないが、

建築調査からみえる国士館大講堂の建築的特性



写真 10 側柱・土台緊結金物



写真 9 土台アンカーボルト



写真 12 廊下と広間境の足固め



写真 11 廊下床下



写真 14 身舎の軸部（中央丸柱柱頭部）



写真 13 広間床下

土台に込み栓が打たれていることから、土台へは平柄差し込み栓打ちと推定される。

向拝柱（杉）は九寸七分（二九三mm）角で、面取り巾は側柱と同じく柱巾の約一六分の一（約一八mm）である。向拝柱は切石礎石（独立基礎）上に石場建てで立ち、側柱同様柱頭に舟肘木を据えて丸桁を受ける。丸桁下には虹梁が掛かり、その中央に中備えとして舟肘木とそれを受ける束を備える。側柱と向拝柱を繋ぐ虹梁はない。向拝の虹梁は一・三尺×五・六寸（三九四×一七〇mm）の角材である。向拝柱の柱脚には銅板金物が巻かれ、その上部は鯖の尾とする。

柱は背割りが施される。丸柱（入側柱）、側柱ともに建具が建て込まれる面を背割りし、埋木を施す。向拝柱および丸柱の正面出入口の二本は主出入口の反対面、その他の北面（講壇側）とし、埋木はない。いずれの柱も正面から背割りが見えないよう配慮していることが窺える。なお、側柱の窓下、および丸柱の開口部上の下がり壁には、四・五寸×〇・一五寸（一三五×四八mm）の片筋違い（杉）が確認される。

貫（杉）については、広間外周の丸柱に通る三・六寸×〇・五寸（一一〇×一五mm）の飛貫が、小屋裏の敷桁下で確認できる。その他は壁内のため、現状、目視では

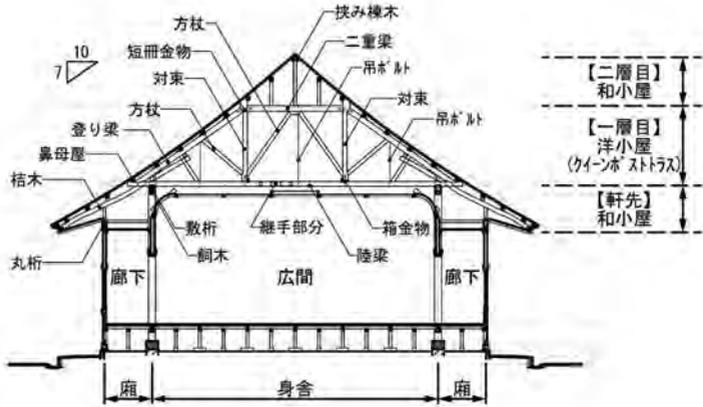
確認できない。なお、古写真を見ると側柱の飛貫は、元々は化粧材として外部に見えていたことが分かる。

軸部の部材は修理された跡がなく、ほぼ全てが建築時のものと判断できる。

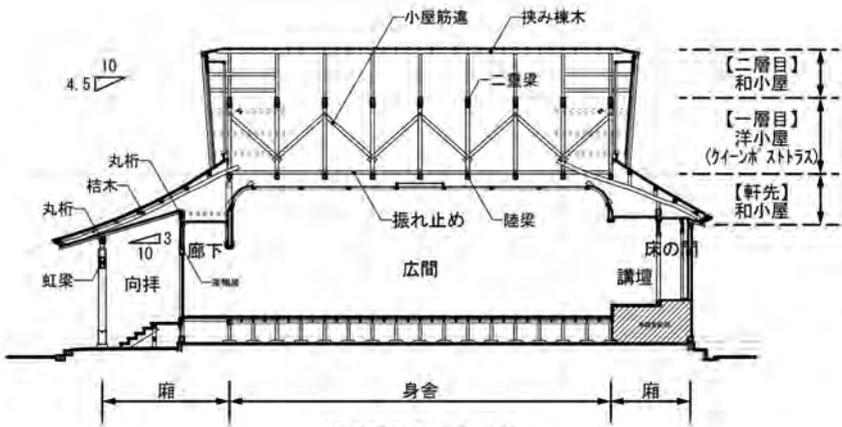
④小屋組

小屋組の構成は、広間（身舎空間）に掛かる一層目（下層）と二層目（上層）、廊下（廂空間）に掛かる軒先行方向丸柱上の敷桁に掛かる陸梁、対束、方杖等で構成されるクイーンポストラス（対束トラス）状の洋小屋組、二層目は洋小屋組の上にある束、母屋、挟み棟木で構成される棟廻りの和小屋組、軒先は枯木、束、母屋で構成される和小屋組である【図3・写真15】。

一層目は陸梁を梁間方向に渡し、その上に登り梁、対束、方杖、二重梁を組み、鼻母屋、母屋を受ける。通常のトラスの場合は、鼻母屋、敷桁は陸梁を挟み込む形で上下に配されるが、大講堂は陸梁を敷桁より張り出し（キャンティレバー）、鼻母屋を敷桁より外側へ二・五寸（七五七mm）持ち出している。登り梁、二重梁と陸梁は直径〇・六六寸（二〇mm）のボルトで吊り、登り梁と陸梁の仕口はボルトで緊結する【写真16・17】。また、対束と陸梁仕口は箱金物（コの字型に曲げ加工した鉄帯金



梁間断面図 S=1/250



桁行断面図 S=1/250

図3 大講堂断面図

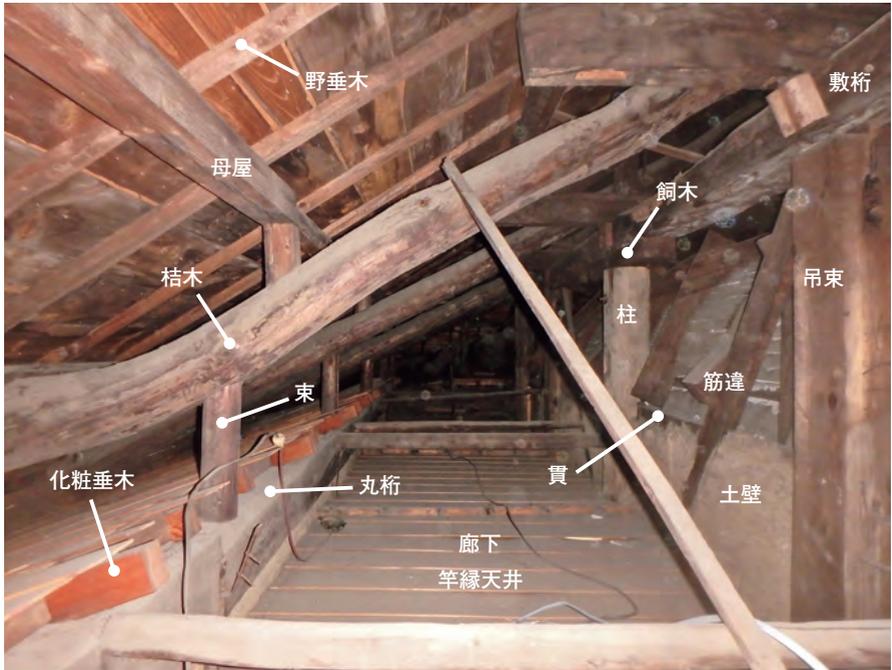


写真 15 廊下上部小屋裏

物)、登り梁と二重梁は対束を介して短冊金物(鉄帶金物)で繋ぐ【写真18】。陸梁は、中央付近に継手を設けており、継手部分は陸梁を両側から六寸×三寸(一八〇×九〇㎜)の板で挟み、直径〇・四寸(二二㎜)のボルト(上下各四カ所、計八本)で締める【写真19】。継手位置は通りごとに棟通りを境に交互に配する。桁行方向は、対東下部の陸梁仕口付近に設置した五寸×〇・一五寸(一〇五×四五㎜)の振れ止めと、各トラス間の対束に斜めに渡す四・五寸×〇・一五寸(一三五×四五㎜)の小屋筋違いで繋ぐ。振れ止め、小屋筋違いは対束とボルトで締め、その挿入位置は各トラス間で対束の内側、外側と交互に配する【写真20】。なお、母屋には一般的なトラス構造同様、転び留めが設けられる。

二層目は、クイーンポストトラス上の二重梁上に束を立てて母屋を受けるが、棟木はトラス構造で用いられる挟み棟木とする【写真21】。

軒先は、側柱上の丸桁に束を立てて桔木を掛け、さらに桔木上に束を立てて母屋を受ける。桔木先端は軒廻りの化粧垂木を化粧ボルトで吊る。茅負かやおいと桔木の仕口は、現状では確認できない。桔木の他端(上端)は、一層目クイーンポストトラスの登り梁



写真 17 登り梁



写真 16 一層目：トラス



写真 19 陸梁の継手部分



写真 18 対束と陸梁を繋ぐ箱金物



写真 21 二層目：和小屋組

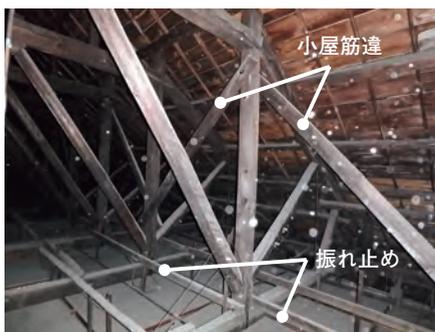


写真 20 小屋筋違・振れ止め

下に通した丸太で押さえる。つまり、丸桁上の束を支点、軒先先端を作用点、丸太で押さえた上端を力点とするテコの原理で軒先を吊り上げる。

洋小屋組は、一般的に間口三〇尺（九m）以上の場合に用いられた小屋組構造で、大講堂では内部に柱を立てない広間の大空間（間口六間＝三六尺＝一〇・九m）を確保するために用いたと考えられる。軒先と棟廻りを和小屋組とした理由は、日本建築の外観意匠の特徴である深い軒の出と屋根反りをもたせるためと推定される。また、鼻母屋を敷桁より外側へ持ち出した理由は、軒の深さおよび棟の高さを確保し、かつ和風外観意匠として必要な屋根勾配を確保するためと推定される。例えば、鼻母屋を敷桁と同位置にすると軒先の屋根勾配が緩くなり、かつ屋根反りが大きくなりすぎてしまうなどの問題が生じ、それを解消するためには軒の深さを浅くするか、棟の高さを下げる必要がある。

以上より、大講堂の小屋組は、必要に応じて適材適所で和洋の両技法を巧みに折衷させ、必要とされた機能（空間）、意匠を具現化させたことが分かる。なお、小屋組材は改変の手が加えられておらず、ほぼ全ての部材は建築時のものと推定される。

⑤ 屋根

軒廻りを化粧軒納まりとする入母屋造り、流れ向拝付き銅板葺き屋根とし、反りと軒反りが付く。

ア 軒廻り

軒廻りは、三寸勾配の木小舞付き化粧垂木天井とする。側柱上の舟肘木に丸桁が渡り、その上に一軒の化粧垂木が掛かる。丸桁および舟肘木の出隅は井桁に組む。化粧垂木は〇・二七寸×〇・二二寸（八〇×六五mm）、一枝（垂木設置間隔）一・五尺（四五五mm）で垂木巾七割（四五五／六五mm）の疎ら割とする。化粧垂木は小屋裏の枯木から化粧ボルトで吊られ、小口銅板を巻く。

軒先は茅負の上に二重裏甲とする。木小舞は〇・八寸×〇・九寸（二四×二七mm）で、六・五寸（一九七mm）間隔で割り付ける。化粧野地板は流れ方向に張り、見え掛り巾は約八寸（二四〇mm）である。隅木は小口銅板巻きとする。なお、本調査では高所のため、隅木部材寸法、軒反り（二軒の割り出し）寸法は確認できなかった。

イ 屋根

屋根は、引渡し七寸勾配の入母屋造り反り屋根とし、向拝の流れ屋根は引渡し四・五寸勾配とする。大屋根と流れ屋根の取り合う箇所は絶る破風で見切る。

野垂木（杉）は〇・九寸×〇・一五寸（二七×四五mm）

で、約一・五尺（四五五mm）間隔で配する。野地板は現状二重に張られており、下層は厚さ〇・四寸（一二二mm）×巾七・六寸（二三〇mm）の杉板を横張りとし、その上に新たな野地板を張る。上層野地板の仕様は目視では確認できない。現状の銅板葺きは、一九八一〜一九八二（昭和五六〜五七）年頃に葺き替えられたことが分かっており（四・一・（3）参照）、上層の新しい野地板はその際に葺かれたものと推定される。

入母屋妻壁は狐格子とする⁽⁸⁰⁾。懸魚、破風、前包は、現状では銅板巻きとしているが、これは屋根葺き替え時に巻かれたものと推定される（四・一・（3）参照）。

⑥ 仕上げ

ア 外部

外壁は腰上を白漆喰仕上げ、腰下をモルタル仕上げとする。正面腰下の濡れ縁上は額縁付き豎板張りとし、濡れ縁下は板子格子とする。土台上には木製水切りを廻すが、正面濡れ縁下には廻さない。腰上の漆喰壁には、古写真より飛貫表しとしていたことが分かっている。柱と壁のチリがほとんどなく、壁チリ際より現在の漆喰仕上げの下に新建材のボード下地が見えることから、土壁の上に後補で施工したと推定される。腰下は古写真より正面同様の額縁付き豎板張りであったことが分かっている。

り、モルタル仕上げは後補のものである【写真22・23】。正面の額縁付き豎板と濡れ縁下の板子格子の一部は、周囲の柱、長押等の部材とその経年劣化状況が異なることから、以前の形式を踏襲して後補材で補修したと推定される。

イ 床

広間は緑色縁付きの畳敷きで、講壇を含め一〇八畳敷きである。講壇は高麗紋縁付きの六畳敷きで、広間より床を一・四六尺（四四五mm）上げる。さらにその奥は、床を五・七寸（一七三mm）上げて、奥行き四尺（一二二二mm）、巾二間（三六三六mm）の薄縁床の床の間を設える。講壇は下部に地覆を廻して畳と見切り、束立として三方框を廻して一段上げる。その小壁は豎板張りで、床框は黒漆塗りである【写真24】。

廊下は緑色縁付きの畳敷きとし、出隅と北東物置前は寄木フローリング張りとする。その仕上げ境は木製見切り材を入れる。

広間と廊下は段差がなく、丸柱（入側柱）の通りに無目敷居を入れて見切る。広間側は畳が敷き込めるよう無目敷居を丸柱面に合わせるが、廊下側は丸柱面より無目敷居が内側（面内）に入るため、畳を丸柱に合わせて円形に欠き込む。廊下側のこのような納まりより、元々の



写真 23 現況 東面外壁

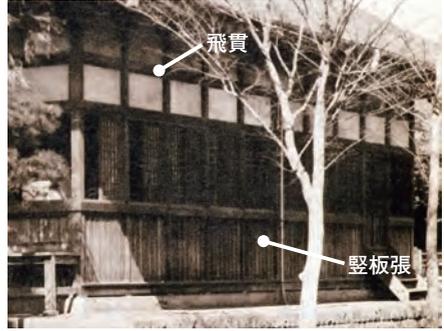


写真 22 1928 年頃 東面外壁
〔『第 2 回中学校卒業アルバム』1929 年 3 月〕



写真 25 現況 下り壁



写真 24 1942 年頃 大講堂内部(畳の縁がない)
〔『第 16 回中学校卒業アルバム』1943 年 3 月〕

仕上げは畳敷きではなく板敷きであった可能性が高い。また、正面出入口および北東の常用出入口の敷居は、廊下より畳の厚さ(約五五呎)だけ下がっており、それぞれの引き込み戸、引き違い戸の開閉時に畳と擦れないよう木製見切り材を入れて調整している。

北東物置は、縁甲板張り(松)で、廊下床高さとはほぼ同じ高さで床を張る。床には東寄り二尺の位置で木製見切り材を入れて見切る。部材の経年劣化状況を見ると、その東側二尺中に張られる縁甲板は後補のもので、西四尺の縁甲板、および見切り材は古いものであるが、建築時のものか不明である。北西物置は後補合板張りで、廊下床高さより畳厚さ分(約五五呎)下がる。

ウ 壁

広間は白漆喰仕上げ、廊下および物置は窓腰下を豎板張り、腰上および内法上を白漆喰仕上げとする。内法上の白漆喰仕上げには天井廻り縁下と柱際の三方に額縁が廻り、額縁には松煙を塗る【写真25】。腰下

の堅板は杉板、巾木⑩および笠木⑪は松である。なお、白漆喰仕上げ下地は、小屋裏から確認したところ小舞下地の土壁である。

北東物置は腰下を堅板張り、腰上を白漆喰仕上げとする。東西面の白漆喰壁には広間と廊下同様、松煙塗りの額縁が廻るが北面にはない。東面（窓側）と西面の広間開口側との内法の高さが異なるが、腰笠木上から内法（鴨居）下面は四方額縁で、長押上は広間と廊下同様、長押上の横額縁がない三方額縁である。なお、経年劣化状況から腰堅板張りの笠木、堅板、巾木、漆喰壁額縁は古いものと推定される。

北西物置は、東西面は腰下を堅板張り、腰上を後補合板張とするが、北面は腰堅板張りがなく、全面後補合板張とする。北東物置同様、廊下窓側と広間側の内法の高さが異なり、北面にも鴨居、長押が付くがさらに低い高さにある。後補合板壁には、東面は内法下上横額縁のない三方額縁、西面は鴨居下横額縁と天井廻り縁下横額縁が残る。経年劣化状況から、堅板張り、額縁は古いものと推定される。

工 天井

広間は一重折上げ格天井で、講壇側の一間は化粧目透し板張り天井とし、いずれも二重廻り縁とする。格天

井平部の格間は梁間五間、桁行七間とし、中央の間はさらに一段上げて側面を換気用の格子とする。格天井板は後補合板張りの白色塗装であるが、折上げの支輪板は木摺り下地、白漆喰仕上げである。折上げの支輪（亀の尾）と格縁の大きさと面取りが異なり、格縁は改修したものと推定される（四・3・(1)参照）。格天井板ならびに格縁以外は建築時のものと推定される。講壇上の化粧目透し板張りは栓柱目の突板（化粧合板）で、こちらも後補の改修によるものである。講壇奥の床の間天井は講壇と同じである。

廊下は二重廻り縁、竿縁天井で、竿縁二本を長手方向に渡し、廊下隅は隅竿を入れて矩折れに廻す。廻り縁、竿縁ともに杉材である。天井板は杉板を羽重ねで張る。経年劣化状況から天井板は後補のもので、その他は建築時のものと推定される。

北東物置は二重廻り縁、後補合板張りである。廊下境の天袋の無目鴨居（二重廻り縁兼用）は経年劣化状況から後補のものと推定され、廊下の二重廻り縁に突き付けで取り付けている。廊下の二重廻り縁は天袋内部まで伸びており、もともと物置奥の壁まで廊下と一連の竿縁天井であったことが分かる。

北西物置は、内法下は根天井、天袋上は二重廻り縁

竿縁天井である。根太天井は外壁側の長押を利用して、他面は後補根太掛けを設けて、根太、合板を張る。この根太天井の部材は廊下境の中敷居、長押を含め、全て後補のものである。竿縁天井は廊下境に二重廻り縁はなく、天袋の無目鴨居を当り欠きあたがをして廊下の竿縁が伸びていることから、もともと物置奥の壁までが廊下と一連のものであったことが分かる。この範囲の竿縁天井は、天井板も含め建築時のものと推定される。

⑦ 柱間装置

ア 建具（全て木製）

正面出入口の引き分け格子ガラス付きかまち框戸とは、四枚建てで外側両脇の二枚が嵌め殺し、内側中央の二枚を引き分けて開口する。差鴨居いは、外側両脇は嵌め殺し用に建具巾だけ溝を彫り、内側の一溝は両端まで通っていることから、もともとこの開閉形式であったことが分かる【写真26】。なお、本建具は戸車付きで、敷居一溝に建具滑り用の帯鉄おびてつが設置される。廊下の北東隅にある常用出入口は、引き違い腰付き格子ガラス戸で、このガラス戸は廊下の



写真 26 現況 正面出入口の框戸



写真 28 現況 北東物置の戸



写真 27 現況 廊下のガラス窓

引き違い格子ガラス窓と意匠、高さを合わせて腰を設ける。廊下の引き違い格子ガラス窓は二本溝で、網戸を片側外部にケンドン形式⁽²⁷⁾で建て込むため、内側のみが片引きで開く。網戸はサラン網⁽²⁸⁾で後補に設置したものである

【写真27】。

物置の両開き木連れ格子戸⁽²⁹⁾は、内法下と天袋に建て込むが、経年劣化状況から全て後補の改修によるものと推定される【写真28】。

イ 敷居・鴨居

建具廻りの敷居・鴨居のほか、広間廊下境に無目敷居と無目鴨居（松）、講壇上の下がり壁に無目鴨居、床の間に床框⁽³⁰⁾と落し掛け⁽³¹⁾が設置される。北東物置の天袋の無目鴨居（天井二重廻り縁兼用）、北西物置の廊下境の無目敷居、中鴨居⁽³²⁾、天袋の鴨居は部材劣化状況から明らかに後補のものである。その他の部材は古いものであると推定される。なお、広間廊下境の無目敷居は丸柱型に当たり欠きをして、突き付けで洋釘留めする。無目鴨居に未使用の釘穴跡が確認されることから、一度取り外して再度付け直したことが分かる。

ウ 長押

外部は、濡れ縁の付く南正面は地長押⁽³³⁾、腰長押⁽³⁴⁾、内法長押⁽³⁵⁾が付く。東面および西面は腰長押、内法長押、北面

は内法長押が付くが、講壇奥にある床の間の張り出しには廻らない。松材で、継ぎ手は柱芯で目違い継ぎとする⁽³⁶⁾が、北面北西寄り（物置裏）のものは明らかに新しい部材で、さらに斜め継ぎとしている。

内部は、広間は内法長押が廻り、講壇、床の間で枕⁽³⁷⁾置き留めとする。廊下は広間と廊下で内法高さが異なるため、段違いで内法長押が廻る。正面出入口はその両脇の柱の面内で長押が留まり、雜留めではなく切り放しのままとする。外部同様、松材で、継ぎ手は柱芯で目違い継ぎとする。

内外部ともに釘隠しはない。

⑧ 木階・濡れ縁

南正面の向拝を潜った先に木階⁽³⁸⁾、濡れ縁が付く。木階は四段で、ささら桁⁽³⁹⁾に段板をのせ、蹴⁽⁴⁰⁾込み板⁽⁴¹⁾が付く。段板はささら桁へ釘留めの上、化粧丸埋木で釘を隠す。部材は全て松材を用いているが、周囲部材との経年劣化状況と比較すると後補補修のものと推定される。

濡れ縁は、正面間口全体に付く。切石礎石に石場立てで束を立て、各束に上楔⁽⁴²⁾打ちの繋ぎ貫を通し、東上部には縁葛⁽⁴³⁾、側柱側は板掛けを渡して切目縁板を受け⁽⁴⁴⁾る。縁板は縁葛、板掛けへ上面から洋釘打ちで留める。束、貫は杉、縁葛、切目縁板は松材を用いる。西端の縁

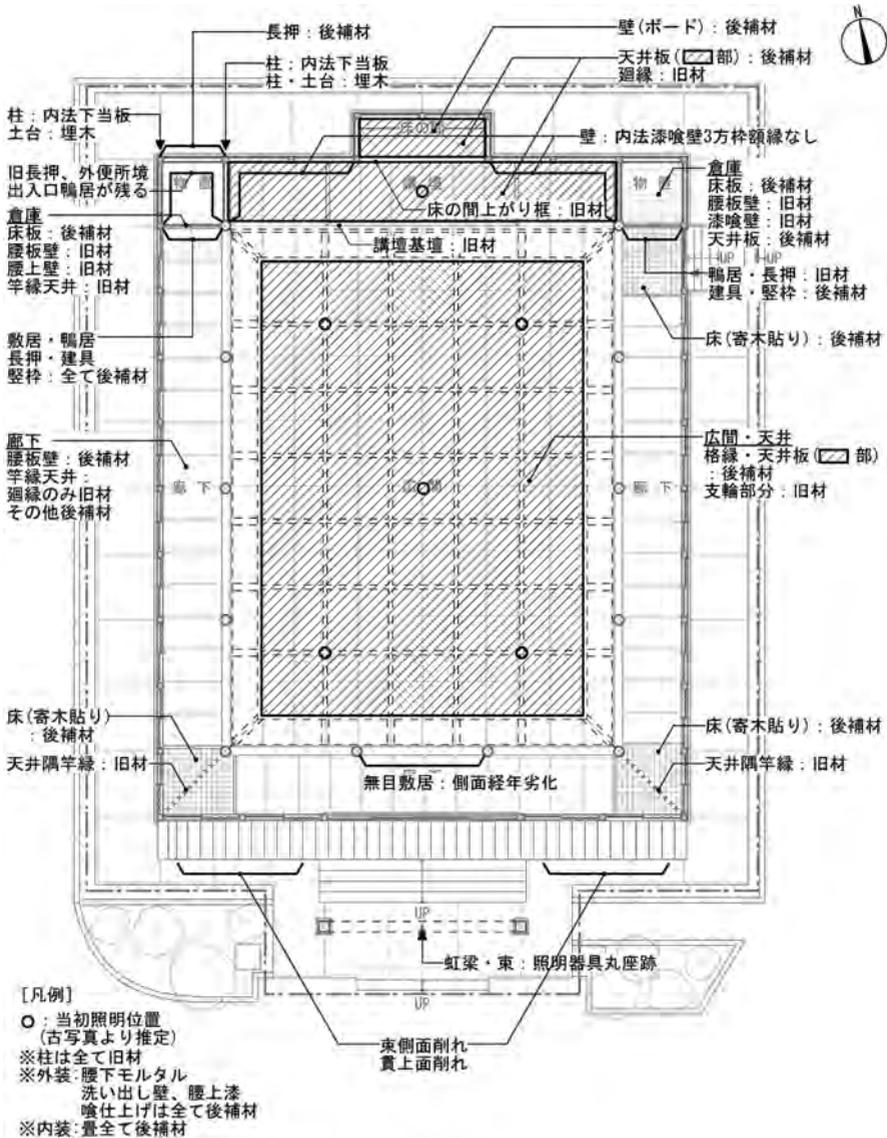


図4 大講堂の改修・変更の痕跡

葛、繋ぎ貫は、経年劣化状況より後補補修材で更新されていることが分かる。また、繋ぎ貫は下楔打ちとする。この箇所の上の地長押も後補補修材で取り換えられ、西端隅の柱は濡れ縁下で矧木⁽¹⁴⁾、さらにその下の土台は六〇〇mm程度の長さで継ぎ補修している。その劣化原因は不明であるが、この範囲の破損が著しかったことが窺える。その他の濡れ縁部材は、部材の経年劣化状況より建築時のものと思われる。

四 改修・変更の痕跡

1 屋根

(1) 天然スレート葺き屋根

「国士館講堂設計図」(『大民』第四巻第五号、青年大民団、一九一九年五月)の立面図【図5】に描かれる屋根は、下り棟⁽¹⁴⁾、隅棟⁽¹⁵⁾と縦線が描かれており、これは瓦葺き屋根を表現したものと解釈できる。しかし、「財団法人国士館設立許可申請書」(一九一九年一〇月六日申請)、「登記簿謄本」(一九四七年一月三日受付)には「木造スレート葺平屋 講堂壹棟 建坪九拾七勺坪」とあり、大講堂はスレート葺きであるとの記載がある。野地板が葺かれた状態で行われた大講堂の上棟

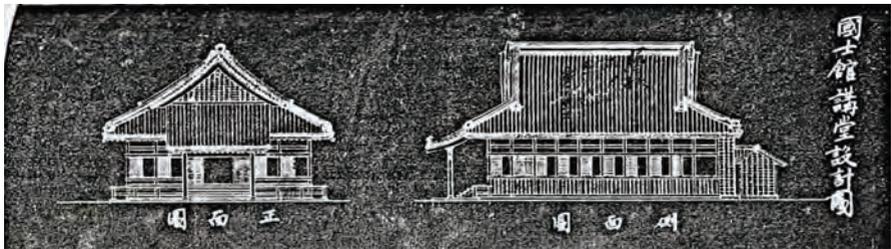


図5 「国士館講堂設計図」(『大民』第4巻第5号〈青年大民団、1919年5月〉)

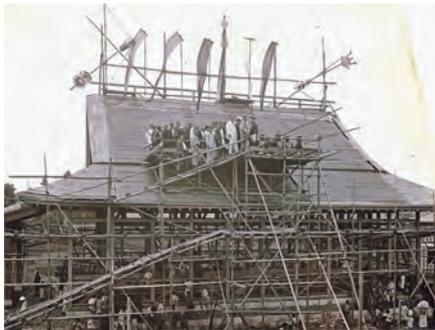


写真30 同右 (側面)



写真29 1919年7月27日 大講堂上棟式(正面)

式（一九一九年七月二十七日）の写真【写真29・30】を見ると、入母屋妻面狐格子下の前包と野地板の隙間は薄く瓦を差し込む余地はないため、この時点ですでに瓦葺きではなくスレート葺きを想定していたことが分かる。

一九一九（大正八）年十一月九日の落成式および開館式の写真【写真31】には、竣工後の大講堂、本部棟、道場が写る。本部棟および道場の屋根は縦横線が写り瓦葺きと推定されるが、大講堂は下り棟、隅棟がなく、軒先がシャープで、かつ屋根面が平滑なため明らかに瓦葺きではない。スレート葺きであったことは、今回の調査で大講堂の小屋裏へ入った際、小屋梁上に天然スレートおよび防水紙の破片が数点落ちていたことから窺い知ることができる【写真32】。

以上より、大講堂は設計時、瓦葺き屋根で計画されたが、工事に当たって計画変更され、天然スレート葺き屋根で竣工したと推定される。

(2) 金属板葺き屋根

一九五七（昭和三二）年の写真【写真33】には、まだ天然スレート葺き屋根の大講堂が写る。

一九五九年に撮影された世田谷校地全景の航空写真【写真34】には、白色の屋根が写る。天然素材の場合、日光が直射した場合でも屋根の全面が輝く白色で写らな

いことから、金属板葺き屋根と推定される。

(3) 銅板葺き屋根

一九八一（昭和五六）年頃の写真には銀色の金属板葺き屋根が写るが、一九八二年頃の写真には銅色に輝く銅板葺き屋根が写る【写真35・36】。二つの写真は、大講堂前の桜が開花し、梅の木に新緑の葉が芽吹いていることから春先に撮影されたものと推定される。また、一九八一年十二月二四日撮影の写真には大講堂の周りに工場の足場が設置されており、この時点において銅板への葺き替え工事が竣工間近であったことが分かる【写真37・38】。また、工事内容についての詳細な記載はないが、大学で保管する一九八一年度の出納帳の三月三十一日付の箇所に「大講堂屋根ふき替え修繕」との記載がある。

以上から、現在の銅板葺き屋根への改修工事は、一九八一～一九八二年にかけて実施されたことが分かる。なお、大講堂が写るその他写真を比較すると、屋根廻りの工事に関連して下記の改修、修理工事が実施されたと推定できる。

- ・破風、懸魚は、以前は木地表しであったが、銅板が新たに巻かれた。
- ・垂木、隅木、縋る破風の木口（こぐち）に銅板が巻かれた。



写真 31 1919年11月9日 国士館落成式・開館式（左：大講堂、奥：道場、右：本部棟）



写真 32 小屋裏で見つけた天然スレート破片



写真 34 1959年 世田谷校地全景写真(拡大)



写真 33 1957年3月 短期大学第3期卒業式



写真 36 1982 年頃 銅板葺き屋根
（『体育学部第 24 回卒業アルバム』1983 年 3 月）



写真 35 1981 年頃 銀色の金属板葺き屋根
（『体育学部第 23 回卒業アルバム』1982 年 3 月）



写真 38 1982 年 1 月 27 日撮影（工食用足場がない）



写真 37 1981 年 12 月 24 日撮影

2 外装

建築されて間もない頃【写真 39・40】の外装は、前述の「国士館講堂設計図」にも描かれている通り、腰下は堅板張り、腰上は飛貫を表した漆喰仕上げである。

一九七七（昭和五二）年の写真【写真 41・42】では、まだ内法上の飛貫を表した漆喰仕上げと腰下の堅板張りを見ることができ、一九八二年の銅板屋根改修工事竣工後には、内法上の飛貫はなくなり、全面白漆喰仕上げへ変更される【写真 43・44】。なお、その壁下地は土壁の上へボード下地を張り、仕上げている。また、正面（南面）窓下の腰堅板張りには、以前の意匠を踏襲して新材へ取り替え

※垂木には以前、木口銅板はなく、樋を受ける鶴首金物が木口差しであった。現状の樋受け金物は茅負に設置している。

- ・ 樋は銅製の新補材へ取り替えられた。
- ・ 向拝柱の柱脚に、銅板金物が新たに巻かれた。

建築調査からみえる 国士館大講堂の建築的特性



写真 40 1939 年頃 大講堂 (西側)
([『第 8 回専門学校卒業アルバム』1940 年 3 月])



写真 39 1928 年頃 大講堂 (南東側)
([『第 2 回中学校卒業アルバム』1929 年 3 月])



写真 42 1977 年 4 月 11 日 大講堂 (東側)



写真 41 1977 年 3 月 29 日 大講堂 (南東側)



写真 44 1982 年 4 月 1 日 大講堂 (西側)



写真 43 1982 年 4 月 1 日 大講堂 (東南側)

ているが、その他の面はモルタル塗りに改変される。東面腰貫（こしめき貫）、および入母屋妻面の狐格子と軒先の茅負（ちやう）、裏甲（うらこう）、継る破風は、周辺部材との経年劣化状況が異なり、改修後、木地色になっていることから、新補材へ取り替えたか、旧材に洗いをかけた可能性が高いと推定される。その他、正面濡れ縁の繋ぎ貫が新材へ取り替えられている。

3 天井

(1) 折上げ格天井

広間の折上げ格天井の支輪と格縁について、仕様（規格、面取り等）と部材の経年劣化状況が異なることから、天井は改修されたと推定される。また、折上げ支輪の天井漆喰は木摺り下地で、格天井は合板ボード下地の上に白塗装仕上げとされていることから、支輪は旧材、格縁は後補材と推定される。

一九六〇（昭和三五）年頃の古写真【写真45】をみると、平部格天井の不陸（ふりく）が激しい。翌一九六一年頃の写真【写真46】をみると、不陸が是正され、格縁が一回り細くなっていることが分かる。以上より、広間格天井は一九六〇～一九六一年頃の間に改変したと推定される。

(2) 化粧合板目透かし天井

広間講壇上、および床の間の化粧合板目透かし天井は、現況、桧の突板を用いており、後補改変と判断される。その時期は不明である。なお、二重廻り縁は、部材の経年劣化状況より建築時のものと推定される。

(3) 竿縁天井

廊下竿縁天井は、部材の経年劣化状況より、二重廻り縁と竿縁は建築時のもので、天井板は後補改修と推定される。

現状、北東、北西の物置には天袋が付き、廊下と間仕切っているが、東西物置ともに廊下の二重廻り縁が物置内部まで伸びていることから、建築時は廊下と一連の竿縁天井であったことが分かる【写真47・48】。なお、建築当時と推定される部材は、北東物置は二重廻り縁のみで、北西物置は二重廻り縁、竿縁、天井板全てである。

広間の講壇側を臨む一九四二（昭和一七）年頃の古写真をみると、その両脇廊下の先が写っている【写真49・50・51】。北東物置は、内法下に建具を建て込むが上の天袋部分に建具はなく解放されており、奥北東隅の柱が見える。改修年代は不明であるが、一九六三年五月の古写真【写真52】にも同様のものが確認される。北西物置は現状位置に建具はなく、側柱側の長押とともに、さら

建築調査からみえる 国士館大講堂の建築的特性



写真 46 1961 年頃 大講堂天井
(『体育学部第 3 期卒業アルバム』1962 年 3 月)



写真 45 1960 年頃 大講堂天井
(『体育学部第 2 期卒業アルバム』1961 年 3 月)



写真 48 現状 北東物置の天井



写真 47 現状 北西物置の天井

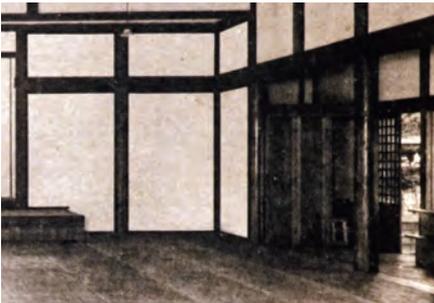


写真 50 1942 年頃 北東物置側(写真 49 拡大)



写真 49 1942 年頃 大講堂内部
(『第 16 回中学校卒業アルバム』1943 年 3 月)



写真 52 1963年5月27日 北東物置



写真 51 1942年頃 北西物置側(写真49拡大)

に奥一間の位置の一段高い高さで、鴨居、建具が建て込まれる。これは現存しない外便所入口と推定され、建築当時は廊下がそこまで伸びていたことが分かる。改修時期は不明であるが、外便所の解体以降の可能性が高い。後述するが、外便所の解体時期は一九六四〜一九六六年頃と推定される。

4 床

(1) 広間・廊下

広間と廊下は、現在、常時同一の畳を敷いているが、古写真を見ると、講演場、武道場、茶道場など、その

用途に合わせて縁付き、縁なし畳を使い分けていたことが分かる。

現状の畳を剥がすと、入側丸柱、および無目敷居の広間側の畳と接する部材面は経年劣化が進行していないため、建築当時より畳敷きであったと推定される【写真53】。同部材の廊下側を見ると、経年劣化状況が畳に接する面と畳上の丸柱表面と同じである【写真54】。廊下の中木（現状は畳寄）も同様の経年劣化の状況であることから、廊下側は畳下まで露出していたと推定される【写真55】。なお、外部出入口の敷居は、現状、廊下畳床から畳の厚さ分低い位置に付いている。

一九二八（昭和三）年頃、一九三六年頃の古写真【写真56・57】より、廊下に縁甲板が張られていることが分かる。足元をよく見ると縁甲板の出隅は角張り（隅を斜めに留める）とし、広間境の無目敷居は縁甲板より畳厚さ分、一段上がる。廊下の中木は現状と同様の高さである。一九六七年頃の古写真【写真58】を見ると、廊下に見切り材が付いているが、床の縁甲板張りは残っている。現状の床への改修時期は、一九六八年以降と推定される。

(2) 北東物置

床は縁甲板張りで、廊下畳と同じ高さである。経年劣

建築調査からみえる 国士館大講堂の建築的特性



写真 54 現状 広間境廊下側の無目敷居



写真 53 現状 無目敷居（広間側）



写真 56 1928年頃 廊下(南正面出入口付近)
(['第2回中学校卒業アルバム』1929年3月)



写真 55 現状 廊下巾木



写真 58 1967年頃 廊下(南正面出入口付近)
(['体育学部第9回卒業アルバム』1968年3月)



写真 57 1936年頃 廊下(南正面出入口付近)
(['第5回専門学校卒業アルバム』1937年3月)

化状況を勘案すると、床板は比較的古いものである。内部の三方に廻る腰豎板張りは経年劣化状況から建築時のものと推定されるが、床からの巾木の出が少ない【写真59】。建築当時は廊下の縁甲板張り床と同じ高さで床板が張られていた可能性もある。現状の縁甲板張りが建築時のものであるかどうかは定かでない。

(3) 北西物置

床は後補合板張りで、床の高さは廊下畳床より畳厚さ分低い。内部両脇の腰豎板張り壁は経年劣化状況から建築時のものと推定され、床からの巾木の出も古写真と同様であることから、床の高さは建築当時から変わっていないと推定される【写真60】。この箇所は現存しない外便所へ繋がる廊下であり、建築時は廊下の縁甲板床張りが伸びていたと推定される。

5 内壁

(1) 広間

広間の内壁は大きく改修している痕跡等はないが、壁際に周る松煙塗りの額縁が講壇脇の内法の壁下等で現存しない。一九四二（昭和一七）年頃の古写真【写真61】を見るとその範囲および講壇段際に周る額縁が確認される。その額縁が写る古写真は一九六三年頃のもの【写真

62】が最後であり、その後は写真が不鮮明であることから確認できない。改修時期の確定はできないが、一九六四年以降と推定される。

講壇奥の床の間は、現状折れ戸形式のパネル壁が建て込まれ、その奥は後補クロス貼り壁となっている。奥の壁の手前にパネル壁を設置しており、明らかに後補のものであるが、改修時期は不明である【写真63・64】。

(2) 廊下・物置

廊下と物置は、腰下は豎板張り、腰上は白漆喰仕上げの上、壁際に松煙塗りの額縁を廻す。漆喰壁および額縁は建築当時のものが残っている。腰壁は、部材の経年劣化状況から物置内部の一式は建築当時のもの、また廊下の板壁は後補材と推定される。北西の物置の腰壁は廊下から延びているものであり、ここに建具枠が後付けされている。このため北西の物置は、建築当時は廊下であったと推定される。

6 建具（柱間装置）

(1) 外部建具

外部建具は、一九八一（昭和五六）～一九八二年にかけての銅板屋根への改修の際、正面の主出入口、北東の常用出入口のものが建築当時の建具意匠を踏襲して新規



写真 60 現状 北西物置



写真 59 現状 北東物置



写真 62 1963 年頃 講壇脇の額縁あり
(['体育学部第 5 回卒業アルバム』1964 年 3 月)

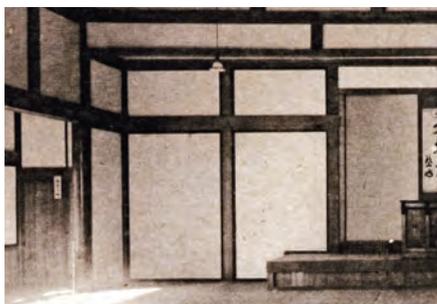


写真 61 1942 年頃 講壇脇の額縁あり
(['第 16 回中学校卒業アルバム』1943 年 3 月)



写真 64 現状 床の間 (パネル壁あり)

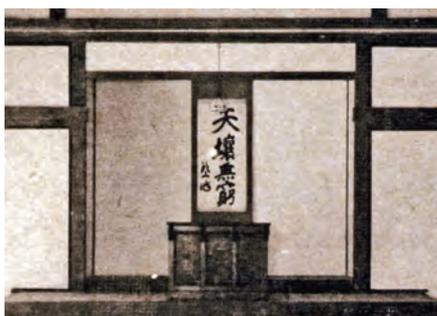


写真 63 1942 年頃 床の間 (パネル壁なし)
(写真 61 に同じ)

製作され、取り替えられたことが古写真より分かる（写真43、参照）。

窓は、古写真、部材の経年劣化状況から建築当時のものと推定される。現在、窓に付いている網戸は、部材経年劣化の状況から明らかに後補材と分かる。建築当初から網戸が設置されていたかは不明である。

柱間装置（敷居、鴨居等）は、部材の経年劣化状況から建築当時のものと推定される。

(2) 物置建具

物置建具は部材の経年劣化状況から明らかに後補材である。一九四二（昭和一七）年頃、一九六一年、一九六三年の古写真【写真50・52・65】に、北東物置に折れ戸形式の板戸が写る。内法下の柱間装置（無目鴨居、敷居）は、部材の経年劣化状況から建築当時のものと推定されるが、入側丸柱東面に埋木が施されることから、以前はここに建具枠が取り付いていた可能性がある。また、無目敷居、鴨居に痕跡がないことから、三連折れ板戸の可能性も考えられる。なお、天袋の柱間装置は全て後補のものである。

北西物置は、建築当初は外便所へ繋がる廊下であった。このため物置開口部の設えは全て後補改修であり、建築当時はその箇所に柱間装置はない。その北奥壁につ



写真 65 1961 年 折れ戸が設えられた北東物置

いては、他の内法より低い位置に鴨居、長押が残っている。一九四二年頃の古写真【写真51】に板戸もしくは板壁が写っており、その開閉形式は不明であるが、外便所の出入口と推定される。

7 外便所

(1) 資料調査

「国士館講堂設計図」（一九一九年）の平面図【図6】では、西側廊下の北端に繋ぎ廊下（奥行き一間）が付き、さらにその先に外便所（図面からの概略寸法で一・

五×二・五間程度)が描かれている。一九二五年頃の「国士館全図」【図7】にも設計図と同様の位置に突き出した建物が見られる。しかし、繋ぎ廊下から先の建物が設計図では大講堂側に矩折れており、「国士館全図」では大講堂と反対側に突き出る形で矩折れるという違いが見られる。

一九三二年頃撮影の外便所の古写真【写真66】を見ると、「国士館全図」と同様、大講堂と反対側に突き出ている。写真より寸法を推測すると、繋ぎ廊下の長さは一・五間、外便所梁間一・二五間程度で桁行は不明である。外壁は繋ぎ廊下、外便所ともに全面下見板壁張りである。屋根は反射しているため分かりにくい、勾配は緩く、軒先が薄いことから天然スレート葺き、あるいは金属葺きの屋根の可能性が高い。外便所は寄棟造りで、繋ぎ廊下の屋根は外便所の屋根より一段低くした切妻造りと推定される。また便所西面上部には換気口を開け、その下に板庇の出窓を張り出す。出窓には豎格子が付き、さらに床付近には豎格子付きの地窓を設ける。繋ぎ廊下には、三本引違いガラス窓の出窓が付く。一九三二年頃の古写真【写真66】をよく見ると繋ぎ廊下の床下は壁がなく、開放しているように見える。また内部は、一九四二年頃の古写真【写真51】を見ると、西廊

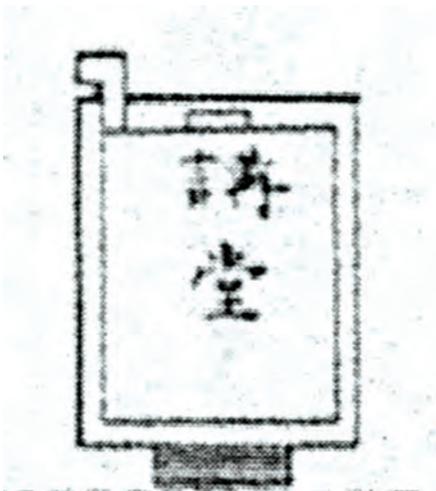


図7 1925年頃「国士館全図」に描かれた大講堂

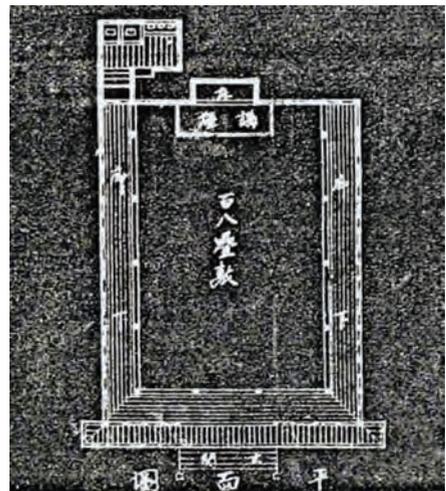


図6 1919年「国士館講堂設計図」平面図 (『大民』第4巻第5号〈青年大民団、1919年5月〉)



写真 67 1962 年 9 月 26 日 外便所 (左側)



写真 66 1932 年頃 外便所 (中央奥)

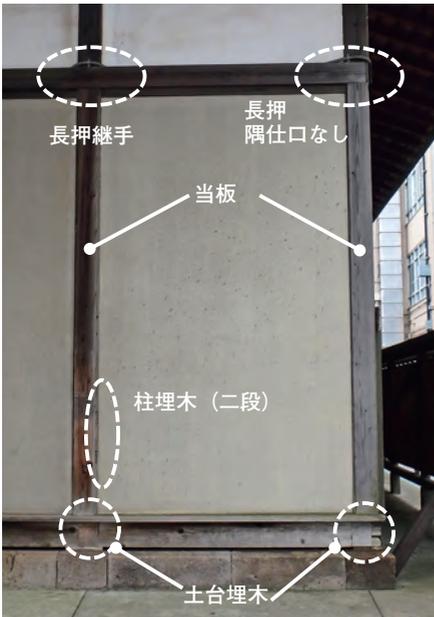


写真 69 現状 北西側物置 (外部)



写真 68 現状 北西側物置 (内部)

下突き当りに木製建具(板戸)か板壁が写り、外便所の出入口境の間仕切りと推定される。

「財団法人国士館設立許可申請書」(一九一九年一〇月六日、東京都立公文書館所蔵)、「登記簿謄本」(一九四七年一月三日受付)に「木造スレート葺平屋 講堂老棟 建坪九拾七勺坪」との記載がある。現存する大講堂の面積は八六・三一坪(本調査実測面積、向拝含む)、「国士館講堂設計図」に描かれた外便所の推定面積は

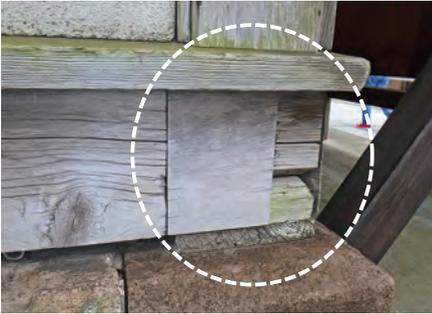


写真 71 現状 土台埋木 (隅)



写真 70 現状 土台埋木



写真 73 現状 柱埋木



写真 72 現状 長押継手

四・七五坪であり、総面積は九一・〇六坪程度となることから、申請書や謄本に記載された面積とほぼ一致する。

(2) 痕跡調査

北西物置の北奥の突き当り壁は腰下豎板壁がなく、経年劣化状況より古い時代のもので推定される鴨居、長押が残ることから、出入口があったことが分かる【写真68】。その外部をみると、多数の痕跡が確認できる。土台は柱が建つ通りに埋木されていることから、北側へ伸びていたと推定される。その土台上の柱は、内法下全面に当板あていたが打ち付けられる。当板は、通常、部材の痕跡を隠すために打たれることから、北へ延びていた壁の痕跡を隠すためのものと推定される。上部を見ると、この範囲の長押が継がれており、その継手つぎて、仕口は他と異なっている。他の長押の継目は縦であるが、この箇所は斜めであり、また、他の出隅は留めとすることが、ここは木口を切り放して仕口がないことから、明らかに後補のものだと判断できる。推測の域を出ないが、長押の斜めの継ぎ目は、かつての繋ぎ廊下屋根の勾配跡の可能性も考えられ

る。さらに、柱下部には埋木が二段あり、これは床板、階段の跡と推定される【写真69・70・71・72・73】。

五 復原考察

大講堂は、内・外装仕上げの改修が数度行われ、北西に突き出していた外便所が解体されたほかは大きな間取りの改変がほとんどなく、主要構造材は建築当時のままである。

表2は、各部位の改修並びに変遷を整理したものである。大講堂の変遷は、大きく四期に分けることができる。

- I期…建築時（天然スレート葺き屋根）一九一九（大正八）年以降
- II期…金属板葺き屋根への改修 一九五八（昭和三三）年頃以降
- III期…外便所解体 一九六四（昭和三九）～一九六六（昭和四一）年以降
- IV期…銅板葺き屋根等の改修 一九八二（昭和五七）年頃以降

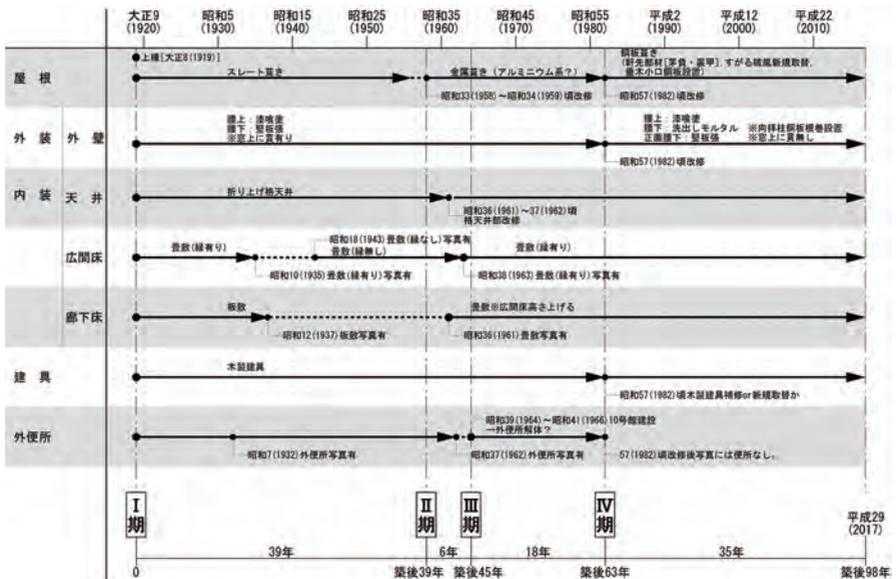


表2 国士館大講堂改修履歴

1 Ⅰ期・建築時（天然スレート葺き屋根） 一九一九（大正八）年以降

建物は基壇上に建つ木造平屋建ての真壁造りで、主規模は現状同様、梁間八間、桁行一〇間、南正面に間口三間の向拝が付く。屋根は妻入りの反りのある入母屋造り屋根で、向拝部分を葺き下ろす。屋根葺き材は天然スレート葺きで、軒先に銅製の軒樋を廻す。外装は腰下を豎板張り、腰上を飛貫表しの漆喰仕上げとし、側柱の柱頭部に舟肘木を据える。

入口は正面向拝と北東の常用口の二カ所である。正面向拝へは、基壇まで石段三段、さらに木階四段を上り、建物梁間の間口中一杯に付く切れ目板張りの濡れ縁へ上がり大講堂内の廊下へ入る。常用口は木階四段を上がり、内部の廊下へ入る。

間取りは、中央を一〇八畳（五四坪）敷きの広間とし、その南東西三方に幅一間の縁甲板張りの廊下を廻す。廊下は腰下を豎板張り、腰上は松煙塗装を施した額縁が廻る漆喰仕上げとする。広間は、廊下の腰上同様、松煙塗装を施した額縁が廻る漆喰仕上げである。天井は、廊下は竿縁天井、広間は折上格天井として天井を廊下より上げ、広間としての格式を高める。広間正面奥には幅三間、奥行一間、高さ一・五尺の畳敷きの講壇を設

け、その奥にはさらに五・七寸上げて幅二間、奥行四尺の床の間を設える。講壇上の天井は無目落し掛けを梁間に渡して広間の折り上げ天井を受け、一段下がった位置で鏡板天井目透かし張りとする。床の間の天井も鏡板天井目透かし張りである。

廊下の北東奥は、内法上の天袋部分が開放され、内法下は折れ戸を建て込んだ物置である。上の開放部は廊下の竿縁天井がそのまま伸びる。物置内部は、廊下同様腰下を豎板張り、腰上を松煙塗装額縁が廻る漆喰仕上げとし、内部に作り付けの木製棚を設ける。

反対側の北西には、外便所（現存せず）が繋ぎ廊下を介して西側へ突き出した形で取り付く。その規模は確定できないが、図面、古写真等の資料より、繋ぎ廊下は中一間、長さ一・五間、外便所は梁間一・二五間、桁行二間程度と推測される。現在物置となっている箇所は、建築当初は縁甲板張りの廊下で、突き当たりの繋ぎ廊下境に建具を建て込み便所と間仕切る。繋ぎ廊下、便所の内部仕様は不明であるが、古写真から外便所は主屋より屋根が低いこと、既存柱の床付近に残る痕跡から、繋ぎ廊下から先は木階等で数段下がっていると推定される。屋根は、外便所は寄棟造り、繋ぎ廊下は外便所屋根より一段低くした切妻造りで、天然スレート葺き、あるいは金属

葺き屋根と推定される。外装は下見板張りで、繋ぎ廊下、外便所ともに西面に出窓が付き、外便所の出窓が付いた部分は手洗いと推定される【図8】。

大講堂は建築当初、教室として使用されるほか、様々な式典や講演会場として利用された。一九二三年九月一日の関東大震災の際は、大講堂を含む国士館の構内は大きな被害を受けなかったため、施設を開放して都心からの避難民を広く受け入れた。また、一九四五年五月二五日、国士館周辺はB二九爆撃機の空襲を受け、校舎のほとんどを焼失したが、大講堂ほか四棟（柔道場、剣道場、正気寮、時習寮）が戦災を免れた。大講堂は、関東大震災、第二次世界大戦、そして激動の戦後を経た一九五八年頃まで、築後三九年の間、建築時の姿が維持された。

なお、戦中・戦後の古写真を比較してみると銅製の屋根樋が取り外された様子が見受けられ、戦時中に供出した可能性が考えられる。

2 II期…金属板葺き屋根への改修 一九五八（昭和

三三）年頃以降

I期と間取りや規模は大きく変わらないが、屋根が銀色の金属葺きに改修された。一九五八年は国士館大学が

創設され、体育学部が設置された年であり、国士館にとって節目の年であった。構内の整備に合わせ、屋根の改修も行われたと推定される。なお、同年、大講堂の東に五号館、一九六三年には大講堂の西に七号館が完成する。この頃の古写真には、まだ外便所が写っている。

古写真を見ると、この頃の広間折り上げ格天井は築後四〇年を経て不陸が著しかったことが分かる。このため、一九六一年頃に改修されて現在に至っていると推定される。大講堂はこの頃、柔道などの道場としても利用されており、このため元々の廊下縁甲板張り床の上に畳が敷かれた。

3 III期…外便所解体 一九六四（昭和三九）

一九六六（昭和四一）年以降

一九六四年三月、大講堂南東の八号館が完成し、一九六六年一月には大講堂北の一〇号館が完成する。この一〇号館の建設に際し、外便所が解体されたと推定される。解体に伴い、廊下北西端の繋ぎ廊下境が物置へ改修された可能性が考えられる。

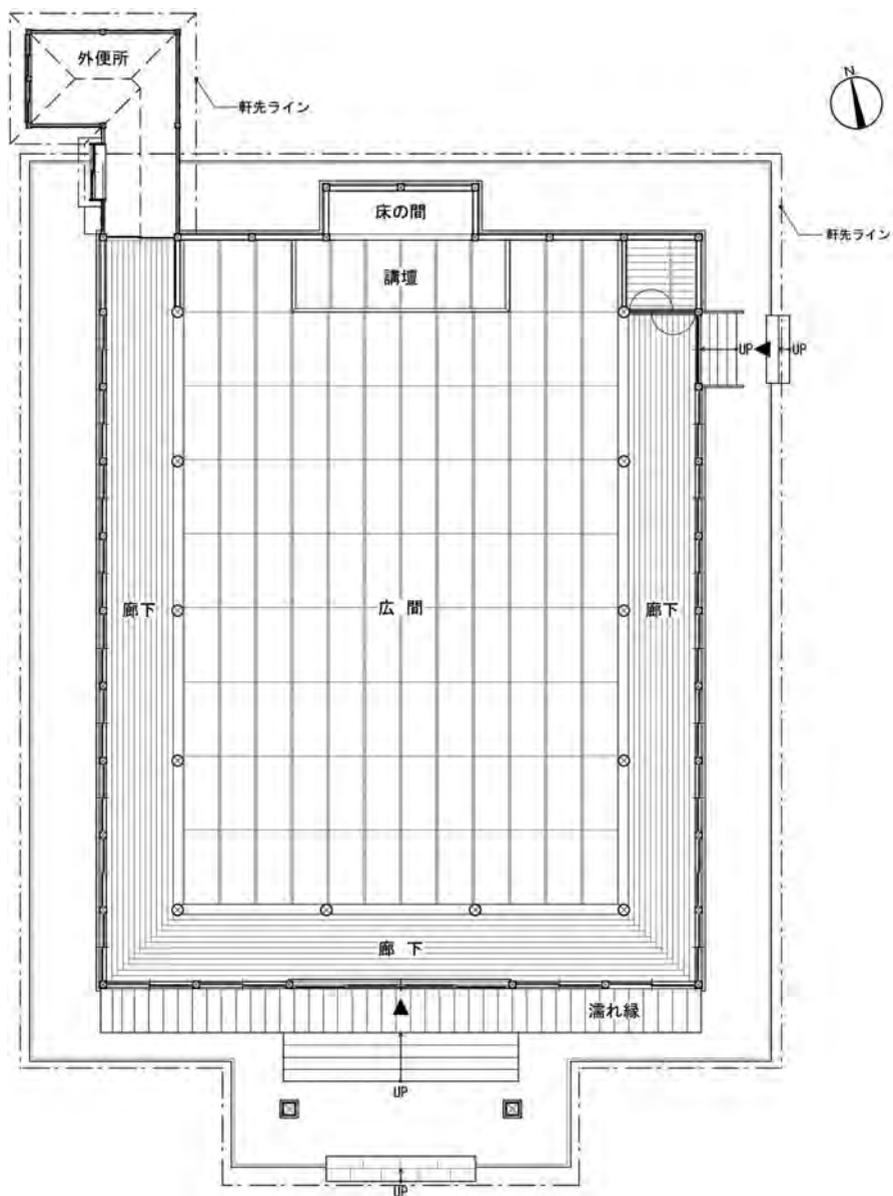


図8 建築当初の大講堂の復原平面図

4 IV期…銅板葺き屋根等の改修 一九八二（昭和

五七）年頃以降

一九八一～一九八二年にかけて、銅板葺き屋根への改修を含む比較的大掛かりな改修が実施された。現在、我々が目にする大講堂の姿は、この改修後のものである。

屋根は銀色の金属板葺きから銅板葺きへと改修し、その際、野地板、軒先廻りの茅負いや裏甲、破風、縋る破風等が取り替えられた可能性が高い。また、垂木軒先、破風、懸魚、向拝柱柱脚に銅板が巻かれた。銅製屋根椀も同時に刷新されている。

外装は、正面の濡れ縁上の腰壁板張りが後補材へ取り替えられ、東西面の腰壁板張りは、モルタル塗り仕上げへ改修された。内法上の飛貫表し漆喰仕上げは、その上にボード下地を張って漆喰仕上げとし、これまでの飛貫表しの意匠ではなくなる。

建具については、正面の主出入口と常用口の建具の意匠は以前のを踏襲し、後補材へ取り替えられた。

床については、断定はできないが後補部材の経年劣化の状況から、同時期に改修された可能性が高い。床組は補強のため、旧材を活かして劣化部を補修、取り替えた上で、補助的に後補材が挿入されている。床束石も同時

期にコンクリート製のものへ取り替えられた。廊下の縁甲板並びに広間の捨て板（荒床）は構造用合板へ張替えられ、畳が敷かれた。この改修の際、工事に絡む廊下の腰壁板張り壁と、広間の内法下の松煙塗り額縁が廻る漆喰仕上げは後補材へ刷新され、内法下の松煙塗り額縁は撤去されている。

また、廊下竿縁天井の天井板、講壇および床の間上の化粧合板目透かし張り天井の後補材への改修についても、部材経年劣化状況から、この時期の可能性が高い。

おわりに

大講堂は、一九一九（大正八）年、国士館が現在の港区南青山から世田谷に移転してきた直後に建築された、国士館の教育理念を象徴する「純乎たる日本式」（「国士館上棟式記事」『大民』第四卷第八号、青年大民団、一九一九年八月）の外観をもつ建物である。一〇八畳の無柱の広間という大空間と日本風の寺院建築（本堂風）の意匠（建築様式）を具現化するため、小屋組構造の一部に洋風技術のクイーンポストトラス構造を採用している。また、屋根は天然スレート葺きを用いており、当時の最先端技術、材料を取り入れ、和洋の両技法を巧みに

折衷させて新たな日本近代建築へと昇華したものであるといえよう。

その用途は、建築時より教室として使用されるほか、様々な式典や講演会場として利用され、関東大震災の際には、被災者を広く受け入れたという記録も残っている。戦時中の空襲の際には、当時の教職員の必死の消火活動により焼失を免れた。その際、大怪我を負った教職員や生徒がいたとの記録も残っている。

大講堂は、その後も国士館大学世田谷キャンパスの中心的、象徴的な存在で、武道場、茶道場として、また大学のオープンキャンパス等の行事やサークル活動に使用されてきた。その内部はシンプルな大空間を保有しているため、様々な用途で使用することが可能であり、その懐の深さを表している。

当初付属していた外便所が解体され、また屋根、内・外装など数度、改変の手が加えられているが、主屋の間取り、規模、構造、意匠形式は往時の姿をよく留めている。二〇一七年一〇月二七日には、国登録有形文化財（建造物）に登録された。講堂という分類における登録文化財としては都内で最古となり、また、和風意匠の講堂は全国的に類例が少なく貴重である。今後も、国士館の建学の精神を象徴する建造物として、保存と活用を両

立した「生きた文化財」であり続けることを願う。

補足となるが、

現地調査の際、どうしても理解できない痕跡が見られた。濡れ縁の束側面と貫上面が削れているのである【写真74・75】。昼休み時間に昼食をとり、大講堂へ戻ってきたところ、国士館の学生が数人、濡れ縁に腰掛け、談笑している姿が見られた。腰掛けた状態で、ちょうど束と貫の位置に足が当



写真74 現状 濡れ縁 束・貫の削れ



写真75 同右 (拡大)

たっていたのである。ここから、この痕跡は改修等によるものではなく、学生たちが次の授業の合間などに濡れ縁へ腰掛け、授業について、あるいは人生を語らう際に足が当たり、削れたことによる経年痕跡であると判明した。各時代の若者が大講堂に集い、語らい、ここを中心に学内外の活動をしていたことを思うと、感慨深いものがあった。

謝辞

調査並びに本稿の執筆について、世田谷区文化財保護審議会委員・堀内正昭氏（昭和女子大学教授・工学博士）、同・重枝豊氏（日本大学教授・工学博士）、世田谷区文化財係の多大なご協力を得ることができました。ここに感謝申し上げます。また、国士館史資料室・熊本好宏氏には、全面的な協力ご助力のほか、当社牧野徹氏ほか所員の調査・整理・図版製作等の協力があり、投稿できたことを感謝の意とともにここに記します。

註

- (1) 野帳…建物の寸法などを測って書き入れたもの。
- (2) 仕口…二つ以上の部材をある角度で接合する工法。
- (3) 「中学校設置認可申請書」（一九二五年三月三〇日）。

『国士館百年史 史料編上』学校法人国士館、二〇一五年、三三四頁所収。

- (4) 基壇…寺院建築の導入とともに日本に伝えられた基礎工法。土盛りの上に建物を建て、周りは石で外装される。

- (5) 真壁…和風木造建築における伝統的構法。壁を柱と柱の間に納め、柱が外面に現れる壁。

- (6) 向拝…社殿や仏堂の正面に差し出された構造物。参詣人の礼拝のためのもの。

- (7) 切目…切った面、線、小口などの総称。

- (8) 濡れ縁…家屋の外側に設けられる雨ざらしの縁側。

- (9) 妻入り…大棟（おおむね屋根の最頂部の棟）と平行な方向に入口のあること。

- (10) 入母屋造り…入母屋屋根を持つ建物の形式。入母屋屋根とは、大棟から地面に向かう山形の二つの傾斜面を持ち（切妻造り）、その四方に庇屋根を付けた形式。

- (11) 軒樋…屋根の雨水を軒先で受ける樋。

- (12) 腰…建物の壁面の仕上げや構造が上部と下部で異なっている場合に、その下部の壁面のこと。

- (13) 舟肘木…柱の上にあつて軒を支える部材の一種。

- (14) 上屋…屋根を支える主要な構造部を指す。本屋の外

- 壁に接して設けられた屋根やその下にある空間を指す下屋げやに対していう。
- (15) 竿縁天井…竿縁をもつ天井。竿縁は天井の下板を支えるため、または化粧として、それと直角に配された細い材の総称。
- (16) 折上格天井…回り縁から湾曲した部材である支輪で折り上げられた格天井。格天井は、断面が二〜二・五寸角の材（格縁うろぐり）を縦横に組み合わせ裏板を張った天井。
- (17) 内法…敷居の上端から鴨居の下端までの長さ。敷居は引戸などを建て込む溝のある下枠であり、鴨居はその上枠のこと。
- (18) 敷桁…壁の上部にあつて柱を連結しておく桁。桁は柱間に架ける水平部材。
- (19) 棟木…小屋組（屋根を支える骨組）の頂部に水平方向に取り付ける横木。
- (20) 支割り…垂木（屋根の下地を支えるため、棟から軒先に渡す長い木材）の幅と成（せい）（上端から下端までの垂直距離）の和を一枝とし、柱間などの心々距離（中心から中心までの距離）を決めるもの。
- (21) 垂木…屋根の下地を支えるため、棟から軒先に渡す長い木材。
- (22) 成…上端から下端までの垂直距離。
- (23) 割肌…石などを割ったままの表面状態。
- (24) 櫛引き…左官仕上げの一種。櫛くし鋸のこぎりで縞状の模様を付けた仕上げ。
- (25) 布基礎…杭などを使用せず直接地盤に基礎を作る直接基礎の一種類。
- (26) 束…短い垂直材の総称。
- (27) テーパー…細長い構造物の径・幅・厚みなどが、先細りになっていること。
- (28) 束石…木造建築の一階床組で床束（床下の束）を立てるために据える径二〇〜二五cm程度の丸い石。
- (29) 足固め…複数の柱の足元を相互につないで建物を固めること、またはそのための部材。
- (30) 貫…柱を貫いて相互につなぐ横木。壁の下地材の取付け固定と壁を補強するためのもの。
- (31) 桁…側柱の上にある水平材で垂木を受ける部材。
- (32) 梁…柱頭あるいは柱上部の側面で主として柄差し（木造建物の仕口の一で柄と柄穴で接合するもの）にしてある水平材。屋根の骨組みを支える。
- (33) 石場建て…礎石の上に直接柱を立てるため、柱の下端を礎石の凹凸に合わせる工法。
- (34) 大引…根太（床板を支える部材）を支える一〇cm内

外の角材の横木。

- (35) 根太掛け…根太の端部を受ける横材。
- (36) 根太…床板を支える部材。
- (37) 長手…材の寸法の長い側。
- (38) 床束…床を支える床下の束。
- (39) 丸太束…丸太の短い垂直材。
- (40) 荒床…仕上げ床面の下張りとして張る板床であり、和風建築では畳の下に張る床のこと。
- (41) 身舎空間…建物本体の主要な空間。
- (42) 庇空間…建物本体の主要な空間に付加された空間。
- (43) 陸梁…建物の屋根を支える小屋組の一種である「洋小屋組」(水平材・垂直材・斜材を三角形に組み合わせて作る)の最も下にある梁。
- (44) 敷桁…壁の上部にあつて柱を連結しておく桁。
- (45) 飼木…二つの部材の間に挟んで両材の位置を正しく保つために使用する木材。
- (46) 丸桁…社寺建築において垂木を受ける横架材。
- (47) 差鴨居…鴨居のうち、特に成が七寸以上二尺ほどまでのもの。建築物を支える柱や梁などを固めたり長い柱間をとるために使用される。
- (48) 中備え…斗拱(柱の上で軒を支える装置)の間にあつて各種の桁を受ける支持材の総称。

(49) 込み栓…二つの木材の接合部分を固定するために打ち込む栓。

(50) 平柄…木造建物の仕口に使われる柄の一。幅に比べると厚さの薄いもの。柱と土台、柱と軒桁などに使われる。

(51) 虹梁…社寺建築に用いられる化粧を兼ねた梁。

(52) 鯖の尾…魚の鯖状に切り込んだ形。

(53) 背割り…木材の芯持ち材にあらかじめ鋸目を入れ、他の部分に乾燥に伴う割れの生ずることを防止する方法。

(54) 埋木…木材の疵や節などの欠陥部分を鑿で穴掘りして木片を充填すること、またはその木片。

(55) 片筋違い…筋違いは柱や梁などで囲まれた四角形の枠組みに対角線状に入れた補強部材のこと。風や地震などによって四角形が菱形に変形するのを防ぐ。片筋違いは、たすき状(X状)ではなく片側方向だけに筋違いを取り付けたもの。

(56) 飛貫…壁の下地材の取付け固定と壁の補強のために取り付けられる貫(建物の柱を貫いて、柱を相互につなぐ横木)の一種。

(57) 小屋裏…建物で屋根裏にある空間。下方は天井によって区画され、小屋組を隠している。

(58) 小屋組・屋根を支える骨組のことで、屋根自身の重さや風圧、雪の重みなどを柱や壁に伝える役割を果たす。

(59) 対束・建物の屋根を支える小屋組の一種である洋小屋組（水平材・垂直材・斜材を三角形に組み合わせて作る）の最も下の梁において左右対称に対立するように設けられた束（短い垂直材）。二重梁（上下二重に架け渡した二番目の梁）を受けるためのもの。

(60) 方杖・洋小屋組において、トラス（三角形形状の骨組）に用いられる短い斜めの部材。

(61) クイーンポストトラス・屋根を山形とし、トラス（三角形形状の骨組）の組み方において、左右一対で使用される対束（短い垂直材）をもつもの。

(62) 洋小屋組・建物の屋根を支える骨組である小屋組の一種。水平材・垂直材・斜材を三角形に組み合わせて作る。

(63) 母屋・母屋桁の略。屋根を支える骨組において、屋根の最頂部の棟、あるいは軒下で垂木を受ける軒桁に平行して垂木または裏板（屋根裏の板）を支える部材。

(64) 和小屋組・日本古来の屋根小屋組。小屋組は建物の

屋根を支える骨組のこと。桁の上に小屋梁を架け渡し、これに束を立てて組む。洋小屋に比べて斜材がほとんどないため水平力に弱く、また大きな梁を作るには不適當だが、構法が簡単であり丸太のように多少の不整形の材も使用できるので経済的である。

(65) 枯木・梃子の原理を利用して、長く突き出ている軒先を支えるための部材。

(66) 登り梁・木造の建物の屋根を支える骨組において、傾斜して架けられた梁。

(67) 二重梁・小屋梁と棟との間にある梁。

(68) 鼻母屋・母屋のうち最も軒に近い位置にあるもの。母屋は屋根を支える骨組において、棟あるいは軒桁に平行して垂木または裏板（屋根裏の板）を支える部材。

(69) キャンティレバー・一端が固定支持され、他の端が自由な梁。

(70) トラス・部材が三角形を単位とした構造骨組の一種。

(71) 転び留め・母屋が転ばないように留めておく材。
(72) 茅負・垂木の端部に載る横木。軒先の曲線を調節するのに重要な役割を果たしている。

- (73) 化粧軒・下から見上げた場合、垂木や野地板（屋根を葺く下地板）などが目に見えるようになってい
る軒。
- (74) 流れ・屋根の水はけのために傾斜面を作ること。
- (75) 木小舞・垂木上に渡した棧。
- (76) 化粧垂木・軒下や室内から見えるような所に現わ
れている垂木の総称。
- (77) 出隅・二つの面が出会って出来る稜線。外側の角の
こと。
- (78) 井桁・「井」の字形のものの総称。
- (79) 疎ら割・垂木や格子の骨組となる部材などを粗く割
り付けること。
- (80) 二重裏甲・裏甲が二重になっていること。裏甲は茅
負（垂木の端部に載る横木）の上に乗る化粧の幅
広の厚板。
- (81) 野地板・屋根葺き材の下地板。
- (82) 流れ方向・屋根の傾斜のついている先の方向。
- (83) 見え掛り・目にみえる部分および見える側をいう。
- (84) 隅木・屋根の最頂部の水平な棟（大棟）から四隅の
軒先に向かって斜めに流れる隅棟（屋根面が互い
に接した部分にできる、隅に向かって傾斜した棟）
を支えている一種の棟木。
- (85) 引渡し・反りや起りのある屋根などで、頂上部の棟
から軒先までを直線で結んだ時の傾斜のこと。
- (86) 大屋根・建物の主要部分をおおう大きな屋根。
- (87) 縋る破風・本屋根の軒先からさらに付け出された片
流れの破風。神社・仏閣などの屋根で、礼拝のた
め設けられた正面に張り出した部分（向拝）の側
面に多く見られる。「縋る」は「しがみつく」の意
味。破風は部材の先端部を隠すために取り付ける
板（破風板）や部位を指す。
- (88) 野垂木・見えない部分にある垂木。
- (89) 狐格子・上部は二方に、下部は四方に傾斜する屋根
をもつ入母屋造りの妻（屋根の最頂部である棟と
直角になる両側面）をふさぐ格子。寺院などに多
い。
- (90) 懸魚・建物の妻側（屋根の最頂部である棟と直角に
なる両側面）において、棟木や桁の先端を隠すた
めの取り付ける装飾用の板。
- (91) 破風・部材の先端部を隠すために取り付ける板（破
風板）や部位を指す。
- (92) 前包・入母屋造りの場合、妻をふさぐ狐格子の下端
と屋根とが接する部分にある水平材。
- (93) 板子格子・町屋の二階に見られる格子の一種。幅

- 二・五寸、厚さ四〜五分の厚板を窓の内側から縦に釘付けにしたもの。
- (94) 水切り・雨水が下面を伝わって壁面に達し、浸水や汚れの原因となるのを防ぐために付ける小さい溝、あるいはL字形の部分。
- (95) チリ・柱を露出する壁である真壁において、柱外面と壁面との距離。
- (96) 長押・柱を両面から挟み付けて大釘で打ち留めて固定した横材の総称。
- (97) 薄縁床・本畳の代りに板畳を敷き込んだ床の間。
- (98) 地覆・構造物の最下部を固める横木。柱の最下端の内側に水平に入れてある。
- (99) 框・床に段差がある時、高い方の床の末端に取り付けられる化粧の横木。
- (100) 無目敷居・戸などの建具を入れ込む溝の刻まれていない敷居。
- (101) 縁甲板張り・床板張りの一種。実^{さね}矧^はぎ（一方の板に凸形の突起〈実〉を、他方の板に凹形の溝〈小穴〉を彫って継ぎ合わせる板の接合法）などにした縁甲板を接ぎ合わせ、床板を支える部材である根太に取り付ける。
- (102) 内法・敷居の上端から鴨居の下端のこと。
- (103) 廻り縁・天井と壁の接する部分に廻す見切り縁。
- (104) 松煙・松を燃やして作った煤。
- (105) 巾木・壁の最下部で床に接する箇所^{箇所}に設けた横材。
- (106) 笠木・扉、手すり、壁の腰の部分に平らに板を張る腰羽目などの上部材。
- (107) 小舞・屋根や壁の下地で竹や貫（水平材）を縦横に組んだものの総称。
- (108) 目透し・二つの部材の接合部の隙間をあけること。
- (109) 二重廻り縁・廻り縁が二段になったもの。
- (110) 格間・格天井などにおいて、縦横に組んだ角材によって形成される正方形の空間。
- (111) 支輪板・天井を一段高くするため使用される湾曲した部材である支輪の裏側に張ってある板。
- (112) 木摺り下地・塗り壁の下地に用いる小幅板。
- (113) 格縁・格天井などにおいて、角材を縦横に組んで形成された区画の格組み。
- (114) 柵目・年輪が材面に対してほぼ直角をなしているような縦断面の木目のもの。
- (115) 突板・木材を刃物で薄く殺いだ板。
- (116) 矩折れ・直角に曲がっていること。
- (117) 羽重ね・外壁や天井などで板を連続的に重ね合わせるっていく方法、またはそのようにして張った部分。

- (118) 天袋…天井面に接して造られる扉または戸付きの戸棚。
- (119) 無目鴨居…戸などの建具を入れ込む溝の刻まれている鴨居。
- (120) 突き付け…加工を施さず、単に材を突き合わせて釘や接着剤などで接合すること。
- (121) 根太天井…根太は床板を受ける横架材のこと。根太天井は、二階の床組を一階の天井として現わしたもの。
- (122) 框戸…戸の四周を固める部材である框の中に板材を挟み込んだ建具。
- (123) 嵌め殺し…窓や障子など嵌めたままで開閉ができない状態、またはその状態を作ること。
- (124) 差鴨居…引戸などを建て込む溝付きの上枠である鴨居のうち、特に成が七寸以上二尺ほどまでのもの。建築物を支える柱や梁などを固めたり長い柱間をとるために使用される。
- (125) 帯鉄…細長く薄い鉄板。
- (126) 腰付き…腰板が張られていること。腰板は板戸などの下の方を板張りにする板。
- (127) ケンドン形式…上を鴨居にはめ込み、下を敷居の溝にはめ落として建て込むこと。
- (128) サラン網…サランは塩化物由来の合成樹脂で防虫網などに用いられる。
- (129) 木連れ格子戸…格子の裏に板を張った戸。
- (130) 床框…床の間の前端に設けられる化粧框（横木）。
- (131) 落し掛け…床の間や書院窓の上部にある小壁下に架け渡してある横木。
- (132) 中鴨居…鴨居と敷居の中間に取り付ける鴨居のこと。
- (133) 地長押…柱の最下部をつなぐ長押。長押は、柱を両面から挟み付けて大釘で打ち留めて固定した横材の総称。
- (134) 腰長押…窓下など腰の部分に回された長押。
- (135) 内法長押…内法にある長押。
- (136) 目違い継ぎ…凹凸を設けて木材を接合する方法や接合部のこと。
- (137) 枕捌き…長押を床柱の裏壁の位置まで回すこと。
- (138) 雛留め…長押を床柱の表面の途中で見切る場合、その木口を隠すために使われる仕口。
- (139) 釘隠し…長押を打ち留めている大釘の頭を隠すための化粧金具。
- (140) ささら桁…階段上に切り込んだ刻み目の上に階段の踏み板をのせて支えるもの。

- (141) 蹴込み板・階段の踏み板と踏み板の間の垂直な部分の板。
- (142) 縁葛・縁側に張る板を支えるために、縁側下の縁束の頭部を連結する横木。
- (143) 矧木・矧ぎ足した材、もしくは矧ぎ足すこと。
- (144) 下り棟・屋根の流れに沿って軒先に向かう棟の総称。棟は二つの傾斜した屋根面が交わる部分。
- (145) 隅棟・屋根面が互いに接した部分にできる、隅に向かつて傾斜した棟。
- (146) スレート・粘土が堆積してできた薄く割れやすい頁岩^{がん}、および頁岩や泥岩が圧力で固まった粘板岩の薄板。
- (147) 木口・部材の端面、木材の切り口のこと。
- (148) 鶴首金物・軒樋を垂木などに固定する金物。
- (149) 腰貫・建物の腰の部分(窓の下辺り)の位置に設けられた貫。貫は柱を貫いて相互につながり、壁下地材の取付け固定と壁の補強のためのもの。
- (150) 裏甲・茅負の上に載る化粧の幅広の厚板。
- (151) 不陸・水平でないこと、面が平らでないこと。
- (152) 「中学校設置ノ件」(『設置廃止(位置変更、改称)に関する許認可文書・中学校・東京都(大正12年 昭和21年)』、国立公文書館所蔵) 所収。
- (153) 下見板・板の長さ方向を水平にして張った板壁、または張ること。
- (154) 寄棟造り・大棟(屋根の最頂部の水平な棟)の両端から、四方に隅棟(屋根面が接した部分にできる傾斜した棟)が降りる建物の形式。
- (155) 切妻造り・切妻屋根を持つ建物。切妻屋根は、屋根の最頂部である大棟から両側に流れをもつもの。
- (156) 地窓・床面に接した位置にある窓。
- (157) 当板・部材に添えて取り付ける板。
- (158) 無目落し掛け・溝の彫られていない落し掛け。落し掛けは、床の間や書院窓の上部にある小壁下に架け渡してある横木。
- (159) 鏡板天井・細長い小材や角材などによる縁がなく、一枚の鏡板(平らで大きな板)を張り上げた天井。